

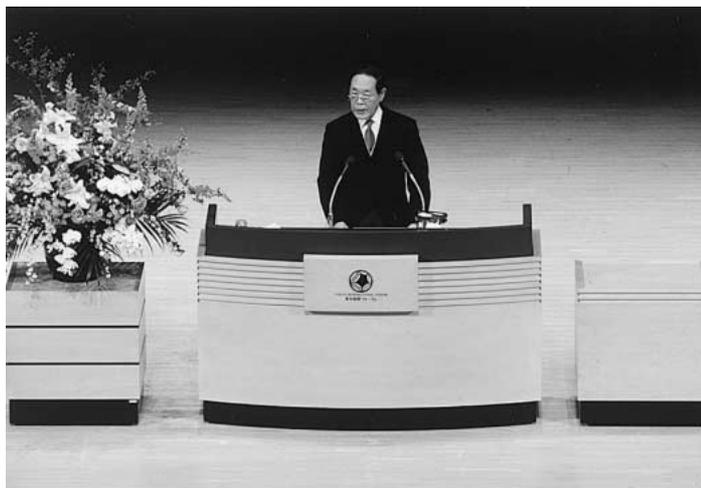
学 内 広 報

2001 . 4 . 11
東京大学広報委員会

平成十二年度卒業式

学位記授与式行われる

(平成十三年三月二十八日(水)・二十九日(木))



(2 ページに関連記事)

目 次

| | |
|--|----|
| 特別記事 | 2 |
| 卒業式における総長告辞、卒業式における卒業生代表挨拶、卒業式におけるソウル大学総長祝辞、学位記授与式における総長告辞、総長就任にあたって、退任にあたって | |
| 一般ニュース | 19 |
| 総長の交代、副学長の交代、総長特別補佐の就任、部局長の交代、部局長の就任、卒業式行われる、学位記授与式行われる、大学院学則の一部改正、学位規則の一部改正、大学院情報理工学系研究科規則の制定 | |
| キャンパスニュース | 32 |
| 平成13年度入学者数決まる | |
| 部局ニュース | 33 |
| 大学院薬学系研究科「医薬経済学」及び「創薬理論科学」寄附講座設立記念講演会開催 | |

| | |
|---|----|
| について、社会科学研究所国際シンポジウム開催される | |
| 掲示板 | 34 |
| 新緑の猪ノ川溪谷へ、「教養学部報」第446 (4月4日)号の発行、平成13年度新規放射線取扱者全学一括講習会開催と放射線取扱者再教育用資料の配付、データベース出張講習会のご案内、コンピューター・ネットワーク利用セミナーのお知らせ、「骨生き物を支えるもの」、「神岡展」、「石と金属の飾り物 前方後円墳時代の装飾品」、情報公開室の開設 | |
| 広報委員会 | 38 |
| 広報委員長就任の挨拶、退任の挨拶 | |
| 訃報(井上 孝名誉教授) | 39 |
| 淡青評論「レポート雑感」 | 40 |
| 広報委員会からのお知らせ | |

卒業式における総長告辞



東京大学総長 蓮 實 重 彦

卒業生のみなさん。東京大学は、あなたがたを21世紀最初の卒業生として世界に送りだそうとしております。すでに始まっているこの緊迫した儀式の一コマが何かの機会に記憶によみがえり、ここにおられる一人ひとりの感性を刺激するものであってほしいと、わたくしは心から願っております。

東京大学の10の学部から学士にふさわしいと認定された3,430人の若い男女は、過去4年間、医学部医学科、農学部獣医学課程の場合は6年間、この大学にとって貴重な人材として、その細部の豊かな多様化に貢献されました。まず、そのことに、深い感謝の念を表明させていただきます。あなたがたは、東京大学という舞台の主演をみごとにつとめられたのであり、どうかそのことを誇りに思ってください。なるほど、一人ひとりをとってみれば、人格として、まだ十分に完成されてはいないかもしれない。にもかかわらず、あるいはであるが故に、あなたがたの誰もが、大学という知的な空間の活性化に欠かすことのできない貴重な存在たりえたのであります。それは、終わることのない持続とともに生成する教育という体験にあって、安易な完成を避けることこそが、真に豊かな可能性を約束するものだからにほかなりません。

いま、晴れやかな主演として舞台を去ろうとしているあなたがたの開かれた未来を、心から祝福せずにはおれません。そう語りかけるわたくしは、快い緊張感にこの壇上で背筋をこわばらせております。その緊張感を、どうかあなたがたにも共有していただきたい。それは、今日の儀式が、東京大学の歴史で初めて、外国の大学の学長を主賓としてお迎えして挙行されているからであります。これまでは純粋に学内の行事に終始していた卒業式は、外部からの視点と、外部からの言葉の意義深い介入によって、新たな表情におさまるはずだとわたくしは思っておりました。すでに、世界の12か国からの外国人学生を含んでいるこの卒業式は、たんなる日本の大学の儀式ではなくなっているからであります。21世紀の到来を期してこの祝祭空間に最初に登場していただくのは、アメリカの大学でも、ヨーロッパの大学でもなく、アジアの、日本にとっては最も近い隣国である大韓民国の大学の総長であってほしいというのが、わたくしのひそかな夢でありました。その夢が実現されようとしているいま、東京大学の招きを快諾されたソウル国立大学李基俊

総長、ならびにソウル国立大学の関係者のみなさまに、深く御礼申し上げる次第です。

李総長をお迎えしたことでなお一層のよこばしい雰囲気のみならずこの祝典の場には、それぞれの資質にふさわしい職業を選択し、今日かぎりこの大学を去られる卒業生も多数出席しておられます。また、大学院に進まれ、研究を続けようとしている方も少なくありません。わたくしとしては、あなたがたのそれぞれの選択が、豊かな未来を約束するものであってほしいと願っています。ここに参列している東京大学の多くの教職員も、ここにはおられないあなたがたの指導教授も、この祈りを共有しておられるはずです。

百年に一度しかない新たな世紀への移行期の卒業式にこうして立ち会えたことは、あなたがたにとっても、また、わたくし自身にとっても、一つの偶然にすぎません。しかし、自分では責任のとりえないこの種の事態を率先して受け入れ、それをみずからの必然へと転化せしめようとする試みのうちに、生きることの倫理がかたちづくられるものなのです。歴史とは、そうした苛酷な、また苛酷であるがゆえに豊かな未来を約束してくれる現実にはほかなりません。どうか現実から目をそらすことなく、自分自身と歴史との関係を充実したものにしてください。

もちろん、あなたがたの前には、たやすくは解消しがたい多くの困難が待ちかかっていることになるでしょう。あなたがたが素肌で向き合うことになる世界は、当然、利害を異にする複数の個体からなる厳しい葛藤の場にほかなりません。そこでは、ときに孤立無援の裸の自分と出会わねばなりません。それを巧みに避けて進む才覚だけを、聡明さと勘違いしてはなりません。そのときえられるほんの一時の心のやすらぎを、幸福と思ったりしてはなりません。他者との軋轢を通して初めてかたちづくられるみずからの存在の歴史性に無自覚なものに、世界が微笑みかけるはずなどないからです。

わたくしは、ここにおられる卒業生の多くがこの大学の学生となられたばかりの四年前の入学式で口にしたことを、思い出してみたいと思います。とはいえ、あの式辞の常軌を逸した長さの再現を目指しているわけではないので、どうか安心して耳を傾けてください。「今日の

日本社会は、ある種の閉塞状態に陥っているといわれております。たしかに政治不信はつのもつております。財政危機は深刻化の一途をたどっております。官庁や民間企業の責任ある地位にあるはずの者たちの無責任な行動もあとをたちません。何かがつまぐいっておらず、このままでは、国家としての日本の将来はきわめて暗いといった論調が支配的であります。わたくしは正確にそう口にいたしました。状況は四年前といささかも変ってはならず、事態は一層深刻になっているというべきなのでしょう。最近の新聞紙面に踊っている大きな活字や、テレビのニュースキャスターの悲憤慷慨ぶりが、そうした印象を助長しているかにみえます。とはいえ、誰に頼まれたわけでもないのに、憂い顔を気取って事態の深刻さを嘆いてみせる趣味は、わたくしにはありません。たしかに、あたりに流通している情報は、わが国の将来に対する悲観的な視点へとひとを誘うものばかりです。国際的な論調は日本に対してさらに厳しいものとなり、海外の大新聞の日本の政治経済状況の分析など、読んで思わず目を伏せたくなるものばかりです。しかし、思い出していただきたいのですが、四年前のわたくしの発言は、「このような悲観的な論調の氾濫には充分すぎるほど慎重でなければならない」という趣旨のものであります。その意味は、ただその場の気分や雰囲気だけで言論の大きな流れがたちづくられてゆき、本来であれば、その流れを改めて分析する必要があるはずなのに、それがなされぬままに、悲観的な論調ばかりが氾濫していることを批判しうる知性が求められているということにほかなりません。政治家たちの言動に左右される不透明な「政局の推移」のみを「政治」と混同し、国民の主権のあらわれにほかならぬ真の「政治」が無視されるなら、悲観論はますます旺盛になってゆくしかないでしょう。

わたくしは、しかし、国民の政治意識はまぎれもなく成熟していると考えております。国民の政治意識の成熟が派閥政治の時代遅れの力学と齟齬をきたしているのが現状だとするなら、マスメディアはその事実を世界に向けて発信すべきだとも考えております。国民の政治意識の成熟は日本社会のよき変化を意味しているはずなのに、それを祝福しえないマスメディアの政治言語の貧しさこそが真の問題であるはずで、その意味で、今日の新聞やテレビの論調は、問題設定そのものを誤っているといわねばなりません。例えば、「政治改革」、「行政改革」、「財政改革」といった問題をめぐる彼らの姿勢がそれを証明しています。多くの政治家が「改革」こそが急務だと深刻な顔で嘆いておりますが、それが問題設定として正当であるか否かを問うという任務をマスメディアが回避しているのです。事実、「改革だ」「改革だ」と声を高め、制度をあれこれ手直しするのが愚かな時間の浪費だととなえた新聞やテレビは一つもありません。十数年前に鳴り物入りで実現された「政治改革」が肝心の点でいささかも有効でなかったことは、ごく最近の政治情勢によって明らかであります。つい最近、省庁

再編というかたちでとりあえずの決着をみた「行政改革」が、小選挙区比例代表並立制という国民の誰もが納得しがたい制度に落ち着いたかつての「政治改革」同様に、社会にとって有効な変化を導入しえないであろうことも目に見えております。それは、「制度改革」という、それ自体がすでに「制度」化された手続きが、真の変化を恐れる人びとを勇気づける反動的な「制度」にほかならないからであります。こう指摘することは、わたくし自身が批判した悲観的な論調の氾濫に加担することではないかといわれるかも知れません。しかし、そうではありません。わたくしは、現在の日本社会は、国民の一人ひとりの意識と行動の水準において大きく変化し始めており、それを率先してよこすべきだと考えております。過去10数年の日本社会がある種の閉塞感の中に生きていたのは間違いのない事実だとしても、その間、国民が未来に対する信頼をすっかり見失っているというのは途方もない勘違いであります。過去10年の日本社会は、それに先立つ狂乱の一時期にくらべて、遥かに健全な社会となりつつあり、しかも、その健全さと呼びこんだのは「立法府」でも「行政府」でもなく、国民一人ひとりの自覚なのです。

こうしたわたくしの年来の主張は、ごく最近、外国の日本問題の専門家の発言によっても補強されました。コロンビア大学のジェラルド・カーチス教授は、フランスの最高学府での講義に先だち、「ル・モンド」紙のインタビューに答えてこういっておられます。「日本社会は、過去10年間、40年かけてもできなかったほどの変化を実現しました。しかし、その変化は、政治の現実には反映していない。だから、永田町だけを眺めていると、停滞と硬直化と変化の不在ばかりが見えてしまうのです。カーチス教授は、大学を卒業しながらあえて社会の周延部分に生きることを選んだ若者や、あらゆる領域で変化を主導している女性たちの活躍に注目しつつ、そういっておられます。深刻な不況だといわれているのに、東京の町はかつてないほど文化的な活気にあふれていると驚くわたくしの海外の友人たちの印象も、ほぼカーチス教授の見解と一致しています。日本社会は、いま、かつてないほどの潜在的な活力にみちあふれているのです。それは、人びとが、日本近代の歴史で初めて、組織の中の自分の位置に対する過剰な目配りとは無縁に、個人の資格でものを考え、行動し始めていることで可能となった変化なのです。

それがもっとも顕著にあらわれているのは、文化の領域でしょう。文学、映画、演劇、音楽、建築、舞踏、モード、CGなど、過去十年來、日本人の作家や研究者の海外での活躍とそれに対する国際的な評価はかつてなく高まっております。それは、海外の新聞の文化面や科学面に目を通してみれば明らかです。東京大学の研究水準も、その歴史の中で、いまがもっとも高い国際的な評価を受けております。それも、大学という権威的なシステムの保護によるものではなく、個人の発想の大胆さと行動力の幅広さとが可能にしたものです。「ニューヨー

ク・タイムズ」紙が、ごく最近、東京大学が大きく変化しつつあるという記事を書いたのも、偶然ではありません。

好況といわれた1980年代後半の狂乱の一時期にいたる戦後日本の繁栄は、誰ひとりとしてみずからものを考えず、行動せず、システムだけが作動していればそれで自分も保護されると信じられていた時代の醜い産物にほかなりません。システムが作動しているかぎり、政治も、官僚制も、民間の経済、産業、金融の諸制度もうまくいっているかのような錯覚にとらわれ、誰もが変化することへの権利を放棄してしまったのです。個人がものを考えずにすむ巨大なシステムとしての日本が緩やかながら崩壊し始めていることを、わたくしは心から祝福したい気持ちです。制度の無自覚な維持ではなく、みずから変化しつつ、新たな自分自身を発見しようとする個人が、社会の中でもものを考える時代が始まっているのです。そうした意識や行動の変化をすくい上げる場が、「政治」にも「行政」にも「マスメディア」にも存在していない。真の変化を恐れるあまり「制度改革」をとさえずにはいられない人びとは、いま、機能不全に陥った制度にかわるもう一つの便利な制度があると錯覚し、その設計をむなしく模索しながら時間を浪費している。わたくしたちは、彼らのベシズムを共有することなく、この過渡的な混乱を自信をもってぐり抜けることができるはずです。そうすれば、日本は間違いなく変わります。東京大学は、そのよろこばしい変化を加速させるために、あなたがた卒業生を送りだそうとしているのです。

わたくしたちの身のまわりには、ちょっと手を触れればたちどころに変化する柔軟な細部にあふれています。にもかかわらず、禁じられているのでもないのに変化への契機を自粛させてしまう何かが、社会に漂ってありました。その大がかりな自粛の力学にさからうのはごく簡単な話です。たとえば、卒業式に外国から賓客をお招きしてはいけないという規則は、どこにもありません。そこに一つの変化を導入したいと思っていたわたくしは、ソウル国立大学の総長をお招きしたいという希望を学内の重要な会議に提案しました。さいわいなことに、ひとりの反対もないばかりか、むしろ積極的に支持するという方がほとんどでした。それをふまえて李基俊総長のご意向をうかがったところ、東京大学の招待をご快諾いただくことができました。

李総長からぜひ祝辞を頂戴したかったのは、これまで何度かの学長会議でお目にかかる機会があり、そのお人柄に強く惹きつけられていたからにほかなりません。お見かけしたところはごく静かな方ですが、その奥底には変革への強い意志と行動する知性とがみなぎっていると感ずることがしばしばあり、この方と何かの計画をともに推進できればと思っておりました。また、ソウル国立大学の文学部系の何人かの教授と共同研究をする機会に恵まれ、両校の医学部間の交流の現場にも立ち会い、ソ

ウル国立大学の教育と研究の水準の高さに心から敬服したという理由もあります。また、昨年、ソウル国立大学を訪れた折りに心からのおもてなしをうけ、すでに存在している交流協定の内容をさらに発展させたいという双方の意志を、李総長とわたくしとが署名したコミュニケによって確信しあったという事情もあります。21世紀の国際社会にとって、また東アジアの学術交流という点からしても、東京大学とソウル国立大学とが一層つよい絆で結ばれることには、はかりしれない意味があります。おそらく、今日の卒業式は、日韓両国の望ましい未来にとって、歴史的な瞬間をかたちづくるものだといっても過言ではないと思います。そのことを、心からよろこばずにはおられません。

しかし、このよろこびが、1936年生まれの日本人であるわたくしにとって、単純なよろこびとはなりがたいものであることを強く自覚しております。20世紀の日本には、韓半島にすむ人びとの自由と人権とを36年にわたって蹂躪するという、いかなる見地からしても到底正当化しがたい過去があるからであります。もちろん、それは、わたくしの祖父や曾祖父の世代の日本人の思慮を欠いた振る舞いによるものであり、それに対して、わたくしの世代の人間は直接の責任をとることはできません。しかし、ここで、わたくしが冒頭に申し上げたことを改めて思い出していただきたい。自分では責任がとれないような事態をも率先して受け入れ、それをみずからの必然へと転化しようとする姿勢のうちに、生きることの倫理がかたちづかれるのだとわたくしは述べたはずですが、そうした倫理にふさわしく、わたくしは、自分では責任がとりたい日本の過去のあやまちについても、責任をとるべきだという結論に到達しております。数年前のソウルの成均館大学の創立記念日の学長会議の席で、わたくしは、わたくしなりの言葉で、初めてその責任の意味について語らせていただきました。それと同じ文脈におさまる発言を、わたくしは、ソウル国立大学総長との対談においても、親しい友人とのテレビでの討論の席でも、くりかえしてまいりました。そうすることが、自分と歴史との充実した関係を結ぶのに必須の振る舞いだと確信しているからであります。

たしかに、自分がおかしたのではないあやまちについて謝罪するということは、倫理的にきわめて複雑な反省をとまなう行為です。しかし、反省を深めたまま何もせずにいることもまた、歴史の無視につながります。そうした考えが導きだした自分の責任のとり方を日本人としてのわたくしはいささかも卑屈なものとは思っておりません。一部の日本人が勘違いしかねぬように、それはいわゆる自虐的な歴史観に惑わされてのことではなく、日韓両国の真の相互理解を築くべきわたくしの世代にふさわしい真の名誉として、そうしたのであります。誤解を避ける意味からいいそえておきますが、わたくしは、ここにおられる若い男女に向かって、大韓民国に対してわたくしと同じ態度を表明すべきだと説いているわけではありません。それぞれの世代にふさわしい歴史との接し方

があって当然であり、あなたがたが、それを生きることの倫理として、自分なりに確立してほしいと願っているのです。

歴史的な記憶を失うことは、それに対する無知と同様、自分自身に対する不誠実な態度であります。それがどれほど悲惨なものであろうと、歴史は、それを直視することで、未来に対する勇気を与えてくれます。歴史とは、そうした苛酷な、また苛酷であるがゆえに豊かな未来を約束する現実なのです。豊かな未来を共有すべき貴重な隣国の一つである大韓民国に対して、歴史的な記憶を歪曲することでみずからの過去を正当化することは、それがもたらすであろう小さな自己満足にもかかわらず、決して未来に対する勇気を与えてはくれないはずだとわたくしは確信しております。ここにおられる一人ひとりが、あるとき、まだ充分には意識されていない潜在的な自分自身と不意にめぐりあい、そのことに深く驚きつつも、それを歴史的な現実として顕在化する勇気を持つことになればと祈っております。

卒業生のみなさん。あなたがたへの別れの言葉を語り終えようとしているわたくしは、なおも緊張しております。それは、わたくし自身が、あなたがたとともに、今年度かぎり東京大学をさる身であるからでしょうか。それとも、自分では責任のとりえない偶然として総長の役割を4年間演じてきたわたくしが、それをみずからの必然に転化することで歴史に出会えたか否かを納得しえないまま、あなたがたにそうせよと説いてしまったうしろめたさからでしょうか。わたくしは、この緊張感から解放されたのちも、その記憶を反芻しつづけることになるでしょう。それは、別れにともなう感傷からではなく、たえず歴史の現在と触れ合っていたいという生の欲求によるものです。この緊張をわたくしに体験させてくれたのは、ほかでもないあなたがたなのであり、そのことを深く感謝し、一人ひとりの幸運を祈りながら、告辞を終わらせていただきます。

平成13年(2001年)3月28日



卒業式における卒業生代表挨拶

卒業生代表 法学部 市原 将 樹

私たちがこの東京大学に入学した1997年4月は、西暦2000年まで残り1000日のカウントダウンがあちこちで始まり、また、目前に迫る21世紀への期待が高まっていたときでありました。そして今、21世紀初の卒業生としてこのときを迎えました。卒業にあたり、喜びと新たな決意を3点にわたって述べたいと思います。

まず第一は、東京大学で過ごし、得たものの価値であります。モトリアムと称されることの多い大学時代ですが、この東京大学も私たちに干渉することはまったくありませんでした。この不干渉のなかで自らの意思のもとに学びとり、経験したことは各人それぞれ異なるわけですが、その主体性と個性ゆえに価値を持つものと私は考えます。私自身、バイタリティにあふれ、知的刺激をもたらしてくれる多くの人との出会い、法学部の授業で政治の魅力や多角的な見方に触れられたことは大きな収穫でありました。このように私たちに大きな恩恵を与えてくれたこの大学の不干渉は、一方で、学生のニーズを満たさない図書館の開館時間や、事務手続きの異常なまでの不便さ、研究と教育のアンバランスなど学習環境の未整備と誤解されている点がいくつかあることも指摘しなくてはなりません。ただ、いずれにせよ、このような環境で私たちが学び、身につけたものは、まだ、自己の内部で実を結んでいるにすぎません。私は、これらの価値は、社会に還元されてこそ意義を持つものと考えます。それは、まさに私たちの今後にかかっているとおもいます。

そこで、第二の点としてあげたいのが、私たちが大学生活を送った時代は社会の大きな変革期であり、また、今後一層、この動きは加速していくであろうということです。この新しい時代は、自ら考え、行動する者としての市民の概念の広まりということに象徴されると思います。このような時代に生きるものとして、私たちは今後日々の生活の場で様々な意思決定をし、また科学技術の進展の担い手や社会における選択肢や道筋を提供する主体として社会との接点を持つわけですが、これによって始めて、今まで私たちが学んだことは自己の内部から解き放たれ、社会性を持つのだと思います。思えば、市民性の概念は在学中にその息吹を見せ始めたものでした。私たちが入学式を迎えた1997年4月11日の新聞は、後に成立する臓器移植法案について報じていました。その他、尊厳死や体外受精、ヒトゲノムの解読なども話題となりました。科学技術と人間の倫理との緊張関係は今後より激しくなっていくものと考えられます。一人一人が生と

死の問題に責任を持たなくてはならない時代になりました。在学中に、その急激な発展を最も身近に感じることができたのは、携帯電話とインターネットでした。情報化時代には情報の取捨選択や利用において、ますます個人の能力が問われることとなります。政治の世界では政党への幻滅感の一方で住民自治の動きが盛り上がりを見せています。様々な分野で一人一人独自の責任ある行動・選択が求められる時代に突入しつつあるのです。このような時代を迎え、私は今後、スピード感覚と柔軟性が重みを増してくると考えます。過去の歴史が示すように、社会の変革期には極端な思想や運動といったものがあらわれがちです。実際、インターネットへの過剰な期待感や内向きの国家観などが今、巷にあふれています。速さこそ全てとはせず、適切なタイミングで物事に対応するスピード感覚と、極端に流れず、様々な選択肢を検討して変化に対応する柔軟性を持つことは欠かせません。一市民として、大学で得たものを基盤とし、このような感性を研鑽し続け、意思決定やその過程に携わることを通じて今まで身につけたものを社会へ還元したいと思います。

第三点目は、今後についての決意表明であります。「自らを限る選択をするな。」これは、高校卒業時にある先生からいただいた言葉です。挑戦せずに安易な道を選ぶことは可能性の幅をどんどん狭くする。挑戦しつづけなさい、という意味だったと記憶しています。社会に出ていこうとする今、東大卒という肩書きに安住することなく勝負し続けるという決意として、この言葉を改めて認識したいと思います。しかし、また、気張りすぎず、わずかでも心に余裕を持つことを忘れないようにしたいと思います。緊張感と余裕とのバランス感覚の大切さも私が在学中に、多くの人から学んだことであります。



最後になりますが、私の好きな詩にアメリカの詩人サムエル・ウルマンの「青春」という詩があります。「青春とは人生のある期間をいうのではなく、心の様相をいうのだ。優れた創造力、逞しき意志、もゆる情熱、臆病を退ける勇猛心、安易を振り捨てる冒険心、こういう様相を青春というのだ。」そして次のように続きます。「人は信念とともに若く、疑惑とともに老ゆる。人は自信とともに若く、恐怖とともに老ゆる。希望ある限り若く、失望とともに老い朽ちる。」この詩の一節を最後の決意表明とし、父母をはじめ家族、友人、お世話になった様々の方に感謝して卒業に際しての挨拶を終わりたいと思います。

卒業式における卒業生代表挨拶

卒業生代表 理学部 杉山昌広

私たちは今日ここに、東京大学を卒業します。そして、これを祝うために今、この場に集まっています。卒業をするために、また、卒業を祝うためにここに集った人はみな、この二点に疑問は持たないことでしょう。しかし、私は、敢えてこの場で、卒業式自体について、問いを立てたいと思います。

私たちの在学期間は、世紀の節目をまたにかけた、激動の時代でありました。東京大学も例に漏れず、かつて象牙の塔と評されたこの大学も、その設置形態自体が問われる独立行政法人化問題に直面していることは、変化の激しさを象徴しています。こうした変化に対応すべく、東京大学は様々な取り組みを進めてきました。なかでも、伝統的な学問分野を超えた新しい学問領域、すなわち情報科学や複雑系科学、環境学などの学問を拓いていくことを目的として、二つの新しい大学院が設置されたことが注目されます。それが新領域創成科学研究科と情報学環・学際情報学府であります。新たな大学院設置の背景には、既存の学問は極度に細分化・分断され、総合的な視点が失われているとの批判がありました。

ところが、振り返ってみますと、私たちの受けた学部教育は、紛れもなく細分化された学問でありました。そして呼応するかのよう、私たちの興味・問題意識も、とても細分化しているのです。物理学において、素粒子の理論的研究を始めようとするものと、弁護士の道に進み、人権問題を解決しようとするものとは、社会の認識の仕方が同様だと想像するのは、甚だ困難でありましょう。

私は問題を提起したいのです。私たちは一つの総合大学としての「東京大学」を卒業するのでしょうか？むしろ、私たちは細分化された学部教育を行った「東京大学経済学部」や「東京大学工学部」を卒業するのでしょうか？もし私たちが各々の所属する学部を卒業するのであれば、わざわざすべての学部の卒業生が一堂に会し、卒業を祝うこのような卒業式は不要でないでしょうか。無論、形式的には私たちはほぼ統一された英語の授業を受け、同じ授業料を納め、何よりも同じ形式の入学試験を受けました。しかし、卒業を祝うこの場では、そうした形式的共通性は何の意味があるのでしょうか？

今日卒業する東京大学学生の共通属性として、「東京大学の卒業生は日本をリードする」ことを挙げる方がいらっしやるかもしれません。しかし、私は、この指摘に疑問を申し上げます。かつての高度経済成長のような「日本の目標」といったものは存在せず、国の「公共性」

ですら疑問視される現代では、少数の人間が国を特定の方向に導くことはありえないからです。国家官僚になる卒業生ですら、旧来の意味での日本のリーダーにはなりません。

それでは、あまりにも「細分化」し、「共通に祝うことを持たない」学生が、それでも卒業を祝う意味は一体何でありましょうか？

私はこの答えを同時代性という、あまりにも当たり前前に求めたいのです。情報化社会の到来でインターネットの普及が進み、空間を超えたコミュニケーション・インタラクションが如何に容易になるうとも、真に「時間を超えた」コミュニケーションは不可能です。私たちは変化の激しい時代の中で、大学生活を東京大学という場で過ごしました。私たちは、この同じ時代を共有するということを唯一の、共通性として、卒業式を祝うほかないのです。そしてその祝うという意味は、共通の大学生活に思いを馳せるという一通りのものではなく、ただ単に、それぞれの人生にひとつの区切りをつけるという社会的儀式以上のものではありません。しかし、逆説的ですが、私はこれが故に、積極的に卒業を祝いたいのです。卒業を祝うということで、同時代に住むという最低限の共通性をこの場で確認することを願うのです。

私自身一人の卒業生ですが、敢えてこう呼ばせていただきます。卒業生のみなさん、是非周りを見渡して、今日卒業する3430名の顔を見て下さい。私にとって、お会いしたことのない顔が、見知っている顔に比べて非常に多いのと同じように、みなさんにとってもお会いしたことのない顔がとても多いのではないのでしょうか？私は、みなさんと一緒に、自分が在学期間中に会うことなかった、学問的興味・関心も、ファッション、趣味、ライフスタイルも異なる学生とともに、今この場で卒業を祝っているという事実を見つめたいと思います。そして、今日卒業する学生はお互いに、二十一世紀における、潜在的な競争相手・ライバルであり、協力するパートナーであるということ、を、認識したいのです。

私たち卒業生一同を指導して下さった教員の方々、お世話をしてくださった事務職員の方々、私たちを支援してくれた家族・友人に深く感謝いたします。

そして、最後に、卒業する学生みなで、次の言葉を分

かち合いたいと思います。
卒業おめでとう。



卒業式におけるソウル大学総長祝辞

ソウル大学総長 李 基 俊
訳文 文責 東京大学（訳文者 吉田光男）

この数年間にわたって続けてこられた学問の道における精進を終え、栄えある学士の学位を取得され、いま学園を離れようとしている親愛なる東京大学卒業生の皆様。

本日、この輝ける場に至るまで、限りない愛情と励ましをもって卒業生の皆様を支えてこられたご家族やご友人の皆様、そして私をこの席にお招き下さった尊敬する蓮實重彦総長をはじめとする東京大学の教授の皆様、また卒業式をお祝いするためにご列席されているご来賓の皆様。

日本にもっとも近い隣国、大韓民国ソウル大学の総長として、ソウル大学の全員を代表し、本日のこの栄えある卒業の式典を衷心よりお祝い申し上げます。卒業生の皆様の未来に大きな幸運と成功が訪れんことを心より祈念しております。

皆様の卒業をお祝い申し上げるために、韓国の大学総長がこの場に立っております。これは韓日両国の大学の歴史上、はじめてのことです。東アジアの近代史を顧みる時、その象徴的な意味には極めて大きなものがあります。これは、ただ単に東京大学とソウル大学という二つの大学の間の事柄にとどまるのではなく、韓日両国の関係の新たな発展のための堅固な礎石になると信ずるものであります。

親愛なる卒業生の皆様。

東京大学はこの120年余りにわたって、日本社会の発展の原動力となってこられました。21世紀にもまた日本の発展に大きく寄与するであろうことを疑う者は一人としていないでしょう。このような意味で、東京大学を日本の指導的な大学として、また世界的な名門大学として発展させてきた全ての東京大学関係者の皆様方に深甚なる敬意を表するものであります。

卒業生の皆様が切りひらいていく未来は、決して皆様個人だけの未来ではありません。日本の未来であり、ひいては世界の未来であります。皆様がそのような未来にふさわしい知性人としての徳目を備えることがとりわけ重要なことでもあります。

知性人に要求されるもっとも緊要な徳目の一つは、偏見のない開かれた世界観をもつことです。没価値的な知識や機械的な理性にのみ埋没する人を、真の知性人だと言うことはできません。しかしややもすれば、優秀な頭脳集団であるほど自己中心的な傾向が強く、他者や他文化に対して開かれた価値観をもつことを疎かにしやすい

という欠陥をもっているものです。東京大学もソウル大学もともにこのような欠陥から自由であるとは言えません。それ故に私は、ソウル大学の卒業生に対しても、他者と周辺国家に対する積極的な理解と配慮という徳目を強調してきました。

人類の歴史において、偏見に満ちた判断や誤った信念がもたらしてきた不幸な歴史的汚点を指摘することは難しいことではありません。他者や周辺国家に対する理解と配慮の欠けた行動が隣人にとっていかに危険なものであるかは、韓日の近代史を見るとき明らかであります。

このように不幸であった過去を克服するため、私は偏見をもたない相互理解と配慮を通じた相生、すなわち協力と共存という徳目を、他の何ものよりも強調したいと思います。歴史的経験は、それが教訓化される時、はじめて未来的な価値をもつものであります。歴史は、忘れることはできても、消し去ることはできません。韓日両国間の不幸だった時代に対する心からなる反省を基盤として、それを克服する意志がある時、はじめて信頼するに足る真の理解が生まれるものと信じています。

親愛なる卒業生の皆様。

私たちが生きていく21世紀は世界化の時代であります。世界化を支えているものは言うまでもなく高度な情報技術です。情報技術の高度化によって、新たな知識の創出と普及が目覚ましい速度で進んでいます。それにとまって人間の生き方も驚くべき速さで変化しています。

このような状況において、東アジア各国は危機に瀕しています。経済と産業の分野は言うまでもなく、社会制度、言語、慣習、生活様式、そしてさらに学問のパラダイムに至るまで、アジア的価値と文化が衰退しているかもしれないという危機感が高まっています。私たちは、現在の世界化の潮流によってもたらされているアジア各国の危機を、新たな発展の機会へと転換させる智恵を出し合わなければなりません。アジアの国家は、アジア的価値と文化を追究し発展させることに協力を惜しんではなりません。

私たちはこのような変化を、より積極的に受け入れ、新たな世界標準を樹立するため先頭に立たなければなりません。世界化時代の新たな尺度となる世界標準は、単に画一的に欧米標準を意味するものであってはなりません。それでは、西欧的な文化と価値が世界のすべての人々の生き方を一方的に規制する可能性を意味してしま

うからです。東アジア標準もやはり、特定の国の標準を意味するものであってはなりません。異なる文化に対する理解と配慮の上に、相生を図ることのできる普遍的な標準が創出されなければならないように、東アジア標準もまた東アジア国家間の相互理解と配慮の上に、相生を図ることができるように創出されなければなりません。

私は、東アジアの大学間における学問共同体 (East Asian Scholarly Network) が形成されれば、アジア的価値を基盤とした世界標準を打ち立てることがより容易になるものと考えています。地理的に近接し、文化的・歴史的にも類似性が存在しているため、東アジアの大学は相互理解と協同と言う点において、大きな利点をもっております。同じく漢字文化圏に属しているため、思考方式と学問的パラダイムをより速やかにかつ容易に受け入れ、また創出していくことができるのであります。

親愛なる卒業生の皆様。

ここで私は、東京大学とソウル大学の間における実質的な連帯と交流についてお話ししたいと思います。東京大学とソウル大学の間における深い理解の増進と相互協力を通して、韓日両国に新しい21世紀型指導者が輩出され、消極的、受動的な態勢ではなく、積極的、能動的に世界史を主導することができるという期待と信頼をもっているからであります。

このため、東京大学とソウル大学は、ソウル大学では日本学研究を、また東京大学では韓国学研究を、それぞれ深めていこうという点で合意し、2000年6月に共同宣言を採択して調印いたしました。この共同宣言に基づいた学生交流の一環として、両大学が交代でワークショップを開催し、韓日両国の歴史と伝統に対して相互理解の契機を作りだし、その上に21世紀のビジョンを創出することを提案いたします。さらに、基礎学問と応用学問の両分野における共同研究が実現されれば、世界の科学に新たな一頁を加えることができ、人文学の共同研究によって東アジア的モデルの人間学に対する画期的な研究成果をあげることもできるでしょう。

このような提案を申し上げながら、私は未だかつてなかったほどの期待感をいただいています。東京大学とソウル大学は言うに及ばず、韓日両国が過去のいかなる時代にあっても、このような形態の相互協力計画を樹立し実行したことがなかったと考えられるからであります。そのような点において私は、東京大学とソウル大学の共同研究システムが本格的に稼働する時、その潜在力によって類例を見ないほどの素晴らしい成果を創出することができるものと確信しています。未来の世界史において、私たち両大学の協力の歩みが持続され、偉大な足跡を残していく時、本日のこの意義深い式典にお招きいただいたことの真の意味が燦然と輝くようになるのであります。

親愛なる東京大学卒業生の皆様。

私は、日本の知性を代表する皆様が、相生の新たな歴史を作り出す主役になられるものと強く信じています。開かれた世界観によって歴史の教訓を我がものとされ、日本を、東アジアを、そして世界をリードしていく優れ

た指導者になっていただくことを希望してやみません。

最後に、卒業生の皆様の未来に大きな栄光があることを重ねてお祝い申し上げ、名門東京大学が限りなく発展されんことを祈願いたします。ご静聴を感謝いたします。



来賓として出席された李総長



学位記授与式における総長告辞

たとえば、ここに一つの寝椅子がおかれていると想像して下さい。その寝椅子をめぐるのは、三つの異なる技術が考えられるはずだとプラトンはいいます。いきなり寝椅子のことが話題になるのは、それが古代ギリシャ人にとってごく身近な家具だからであります。寝椅子のかわりに靴や、手綱や、轡や、笛などをもってきてもいっこうにかまいません。もっとも、寝椅子を例に技術の問題を語りはじめたのは、じつはプラトンその人ではありません。厳密にいうなら、プラトンの著作に重要な対話者の一人として登場するソクラテスがそう口にしてるのであります。しかし、正確さを期そうとするあまり固有名詞が複雑に錯綜してしまうのを避けるために、こうした言表の主体をもっぱらプラトンとして話を進めることにします。

この三つの技術をめぐる対話は、プラトンの代表作とあってよい『国家』の終わり近くに登場します。そこには、一つの道具があれば、「使うための技術」と、「作るための技術」と、「真似るための技術」とが問題になるはずだと書かれております。「使うための技術」が最初に挙げられているのは、その道具のどこが良いか悪いかを道具職人に指摘できるのは、それを現実使用する人においては考えられぬからです。「たとえば」とプラトンは書いています。「笛吹きは、笛作りの職人に笛のことについて、どの笛が実際に笛を吹くにあたって役に立つかを告げ、職人がどのような笛を作らねばならないかを命令する」ことができる」と彼はいうのです。寝椅子や手綱や轡についても同じことがいえるはずですが、手綱や轡を作っているのはもちろん皮職人や鍛冶屋なのですが、手綱や轡についての真の知識を持っているのは、馬に乗る人しかいないという理由があるからです。プラトンの文脈にしたがうと、そのような人びとの接触を通じて、職人たちは初めて自分の作っている道具についての「正しい信念」を持つことになるのです。その意味で、「作るための技術」は、プラトンにおいては、あくまで二義的な価値しか持ちえないことになるのです。

では、三番目に挙げられている「真似るための技術」とは何なのでしょう。たとえば画家は、寝椅子や靴や手綱や轡や笛を巧みな技法で描いて見せることができます。しかし、プラトンによれば、それはあくまで技術としての模倣が巧みだということとどまり、これらのどの職人の技術については、彼は何も知ってはいないのです。実際、画家も、また詩人も、真実には触れることなく、ただその見せかけと戯れているにすぎない存在だとプラトンは

いいます。これは、模倣 - ミメシス - の技術に還元される詩や悲劇に対する深い不信感のあらわれにほかなりません。当然のことながら、その論理にしたがえば、詩人や芸術家は、職人とともに、国家の統治からは排除されざるをえないでしょう。『国家』という著作のめざすところは、知を愛するものとしての哲学者こそ国家の統治にふさわしい存在だと説得することにあるのですから、それも当然でしょう。では、知を愛するとは、具体的にはどういうことなのでしょう。

「作るための技術」や「真似るための技術」が国家の統治にふさわしくないのは、こう考えてみればわかるはずだとプラトンはいいます。たとえば、寝椅子一つをとってみても、三種類の異なる寝椅子が考えられる。まず、イデア的な寝椅子というものがある。それから、大工の作った寝椅子がある。そして、画家の描いた寝椅子がある。「こうして、画家と、寝椅子作り職人と、神と、この三者が、寝椅子の三つの種類を管轄する者として、いることになる」と彼はいうのです。画家と寝椅子職人と神という組み合わせは、今日のわたくしたちの目にはいかにも奇妙なものに映ります。しかし、本質と仮象というプラトンの主題がそれを正当化していることは、すぐに理解できるでしょう。

いうまでもなく、神がかかわるのは、寝椅子のイデアともいうべきものです。プラトンによるなら、神は、ある特定の寝椅子を作るある特定の寝椅子職人ではなく、「真にあるところの寝椅子の真の作り手」にほかなりません。英語の定冠詞の用法を思い起こしてみればよいかもしれませんが、神とは「まさに寝椅子であるところのもの」を創造するのです。しかし、寝椅子職人が作るのはある「特定の寝椅子」でしかない。画家が作るのは、それとの見せかけの類似でしかありえません。画家も、寝椅子職人も、イデア的な世界からは遥かに遠いところに位置しており、いずれも本質には触れえない存在なのです。人格の形成にあたって音楽や文芸の教育を重視しながらも、プラトンがなお詩や悲劇の模倣的な側面を疑問視していたことはよく知られています。彼によれば、詩人は模倣する技術しか心得てはならず、ものごとのうわべの色彩を語句をつかって塗りたくるのみであります。しかし、そこに思わず惹きつけられてしまう人間も少なくはなく、それが危険だという理由で、詩人は正しい国家の統治にはふさわしからぬ存在とみなされてしまうのです。

では、ものを作る人、すなわち職人はどのような欠点を持っているのでしょうか。職人は、詩人のように人を

まどわす危険な存在ではありません。ただ、彼らの仕事はあまりに限定されすぎている。あるいは、プラトンの視点からすれば、限定されたものでないかぎり職人は優れた仕事をなしとげないのです。「それぞれの仕事は、一人の人間が自然本来の素質に合った一つのことを、正しい時機に、他のさまざまなことから解放されて行う場合こそ、より多く、より立派に、より容易になされるということになる」からです。その点からして、「靴作り職人が同時に農夫であったり、織物工であったり、大工であったりする」ことは、国家にとって好ましいことではなくなります。「靴作りはまさに靴作りであって、靴作りの仕事に加えて船長を兼ねるのではなく、農夫は農夫であって、農夫の仕事に加えて裁判官を兼ねるのではなく、戦士は戦士であって、戦争のほか金儲けをするのではなく、そしてすべての者がこのとおりである」ということになるのです。不純なものの混淆をきらうこうしたプラトンの姿勢からは、国家につかえるものは「他のすべての職人仕事から解放されて、もっぱら、国家の自由をつくり出す職人としてきわめて厳格な腕をもった専門家」でなければならないという結論が導きだされるのは当然でしょう。

東京大学の修士号と博士号を手にしたばかりの若い男女を祝福すべきこの式典で、いきなり寝椅子をめぐる三つの異なる技術の問題や、画家と寝椅子職人と神との比較について語り始めたのは、勿論、そこに語られているプラトンの思考に同意せよと誘いたいからではありません。東京大学から修士、博士の称号にふさわしいと認定された方なら、文系理系の違いを超えて一度ぐらいはプラトンを読んでおくべきだと主張したいのでもありません。また、プラトンをめぐる優れた書物を書いておられる次期総長の佐々木毅教授に、この場をかりてオマージュを捧げようという意図があったのでもありません。反プラトニズムの徒を自認しているわたくしには、『国家』の著者に全面的に賛同すべき理由などいささかも持ち合わせてはおりません。ただ、プラトンにそっくり同意はしないまでも、こうした修辭学でプラトンが何をいわんとしているかという程度のことは理解していただきたいと思っただけのことです。神だとかアイデアだとかという言葉に接したとたんに顔をそむけることだけは、どうか避けていただきたいのです。

この3月31日で東京大学の総長を退任するわたくしは、この四年間の任期を通じて、まともに研究も教育もできない苛立たしさを、プラトンと、プラトンを敵視するニーチェの著作を読みあさることで晴らしていました。読みあさったといっても、時間の余裕があると、その断片に目を通していただけにすぎません。そして、寝椅子をめぐる三つの異なる技術への言及や、画家と寝椅子職人と神とを比較するプラトンの論法に惹かれるものを感じたのです。国家から詩人を排除しようとする姿勢については充分承知しているつもりでしたが、彼が下して

いる職人の定義に改めて興味を覚えたのです。プラトンは、職人を、国家にもっとも低い位置で貢献する人びとと考えています。支配者として統治すべき者たちに、神は誕生の瞬間に金を混ぜ与え、これを補助する資質のある者たちには銀を混ぜ与え、職人たちには銅と鉄を混ぜ与えたというのです。この金属の比喩はヘシオドスにみられるものですが、わたくしが興味を惹かれたのは、誕生の瞬間に神の采配によって職人たちの仕事が決まっているという点ではありません。それが「それぞれの人の自然本来の素質にあった仕事である」かぎりにおいて、寝椅子職人は寝椅子を、靴職人は靴を、織物職人は織物を作っていれば成功するはずだという指摘が気になったのです。勿論、自然本来の素質とは、神からさずかった生まれながらの特質というほどの意味です。そうした職人たちの活動が可能なのは、「他のすべての職人仕事から解放されて、もっぱら、国家の自由をつくり出す職人としてきわめて厳格な腕を持った専門家」が国を統治しているかぎりにおいてのことです。だとするならば、国が統治されることなく、職人だけが社会を構成していたらどうなるかと思ってみただけです。

たとえば、現在、日本の国は、統治されてはおりません。少なくとも、プラトンの理想としたかたちでは統治されておりません。いま引用したばかりの「国の自由をつくり出す職人」が政治の世界には見当たらないからであります。あたりをみわたしたところ、いたるところに職人ばかりが動きまわっています。彼らは政治職人として、官僚職人として、銀行職人として、建設職人として、製造職人として、ホワイトカラー職人として、芸術職人として、統治されざる国家の中をせわしなくゆきかっているかにみえます。寝椅子職人が作るのが「特定の寝椅子」にすぎず、「まさに寝椅子であるところのもの」について彼は何も知らないように、あるいは画家が描く寝椅子がそれとのみせかけの類似でしかなく、寝椅子職人については何も知ることがないように、こうした職人たちは、ものごとの本質からは遠いところで、ひたすら仮象と戯れているだけなのかもしれません。今日の日本社会の低迷は、「まさに政治であるところのもの」については何も知らない政治職人の跳梁ぶりによってもたらされているといっても過言ではありません。マスコミなども、さしずめプラトンのいう画家さながらに、「まさに事件であるところのもの」については何も知らぬまま、もっぱら事件とのみせかけの類似を大量に作りだし、それを広く流通させて人びとを惑わせているだけなのかもしれません。

しかし、他人を批判してばかりいる場合ではありません。ことによると、大学においても、総長は総長職人として、教授は教授職人として、学生は学生職人として、大学院生は大学院生職人として、ポスドクはポスドク職人として、「まさに大学であるところのもの」には無知をきめこんだまま、本質とは無縁の振る舞いを涼しい顔で演じているのかもしれないからです。研究については研究者がいちばんよく知っているという主張も、プラト

的な視点からすればきわめて疑わしいことになります。事実、個々の研究者がしているのはあくまで「特定の研究」にすぎず、「まさに研究であるところのもの」については知らずに成就するケースがないとはいいきれません。とりわけ、研究分野が細分化されればされるほど、その傾向は顕著になってゆくでしょう。ことによると、「まさに研究であるところのもの」、すなわちサイエンスについては無知なサイエンス職人であるほうが、個々の研究がはかどる場合が多いのかもしれない。

かつて日本は、経済的に繁栄したといわれております。たしかに1980年代の後半、人びとはそんな印象を持たぬでもありませんでした。日本は一つの成功モデルとみなされ、諸外国からの妬みと羨望の対象ともなっていました。ところが、いまは、経済的な長い不況が日本を疲弊させているといわれており、第二の敗戦といった大袈裟な言葉さえ、人びとの口からもれております。しかし、かつて繁栄と呼ばれたものは、「まさに繁栄であるところのもの」を知ることなく、また知る必要さえ感じてはいない多くの職人たちが、それぞれ「特定の仕事」だけに精をだしていた結果、「繁栄」とのみせかけの類似がうみだされてしまっただけではないでしょうか。そのとき「繁栄」を語った人びとは、プラトンのいう画家や詩人のように、真の繁栄、つまりそのアイデアとは無縁の世界で、その模倣と戯れていただけではないでしょうか。そして、いま、「まさに繁栄であるところのもの」を意識して思考せざるをえなくなったとき、統治の不在が、繁栄の本質からはかぎりなく遠い職人たちから、それにふさわしい身振りを奪ってしまったというのが日本の現状なのかもしれません。そこでは、不幸なことに、寝椅子職人は寝椅子について無知であるというプラトンの言葉があたかも真実であるかに事態が進行してしまうのです。

ところで、すでに触れたように、わたくしは反プラトニズムの徒を自認している人間であります。大学についてであれ、政治についてであれ、その本質は何かといったかたちで展開される議論は、およそ不毛なものだと思っております。もちろん、「まさに寝椅子であるところのもの」という観念の普遍性は、人間の思考に不可欠なものと考え思っています。ただ、それをアイデアという視点で考えようとするつもりは、まったくありません。人間的な事象には、歴史を超えた確固不動の普遍性など存在しないというのがわたくしの出発点であり、その意味で観念論を排し、むしろ唯物論につくものです。

ここでの観念論とは、たとえばグローバリゼーションを論じるとき、なぜそれが問題となっているかを歴史的に考察する以前に、自分のごく限られた個人的な体験から、アメリカ合衆国ではこうだ、ヨーロッパではこうだといった類いの一般論を、何の疑いもなく始めてしまう人たちの姿勢をいいます。社会は、いつでもそうした観念論にみちているのです。ことによると、大学でも、それに似た観念論が珍重されはじめているのかもしれない

ん。それに対して、わたくしはいつでも唯物論で対抗することにしています。ここでいう唯物論とは、わたくしたちにとって真に貴重なものがたやすくは解読されがたい記号との驚きにみちた出会いにほかならず、イメージとして即時的に矛盾なく消費される情報の流通なのではないという姿勢だということもできるでしょう。何の齟齬感もなくやりとりされる情報をその場で消費することは、真のコミュニケーションとはいっさい無縁の体験なのです。

職人とは、日々くりかえし起きているできごとに対する対処能力の習熟度を誇る人間です。だから、事態に大きな変化がないかぎり、職人はほとんど無意識の身振りの反復によって社会に貢献することができます。しかし、その身振りは一般的な原則に拘束されており、みずから変化を作りだそうとはしないばかりか、変化に対応することすらできません。一般性という範疇に属する彼らの振る舞いがそのまま普遍性に到達することなど、ありえないからです。この世界は、まさに変化するものであり、その歴史的な現実に触れるものだけに真に普遍的な理論の構築が可能になるのです。その理論をつくりだす主体は神ではなく、まぎれもなく人間なのであります。わたくしたちは、ここでプラトンから思いきり離れることとなります。プラトンにおいては、普遍性は変化することのない神の意志に発するものであり、職人たちはそれに触れえながゆえに、みずから作りだすものについて何ひとつ知りえない存在でした。わたくしたちが生きている時代が、その関係を反転させることで成立していることを思いだしましょう。人類は、一般原則と思われていたものを超える現実に触れ、その未知の体験による知性の動揺をみずからのものにしながら歴史を生きてきたのです。日々くりかえされる経験は一般的な原則の確認と、それにもとづく事態の説明にとどまり、そのことだけから普遍的な理論が導きだすことは決してありません。習熟した身振りで日々の研究を遂行するだけのサイエンス職人の振る舞いはたえず一般的な原則に保護されており、それを超えたところに見いだされるべきサイエンスの普遍性に触れうるはずもありません。それは、アインシュタインやワトソンとクリックの理論が、一般原則と思われていたものを遙かに超えたところに出現したものであることを思い出してみれば明らかでしょう。それは、比較を欠いた変化の創出にほかならず、習熟した日々の身振りのくりかえしは、それに対してまったく無力だとしかいいえないからであります。

そう思い、またそう振る舞っているつもりはわたくしが、もっぱらプラトンの文脈にしたがい、しかもあまりにわかりやすい言葉で今日の日本に診断を下すことは、正直いって不快な体験であります。その不快感は、真にプラトンの問題が、実は本質と仮象という主題には含まれていないと説くジル・ドゥルーズの哲学的な著作に強く惹きつけられているだけに、ますます高じざるをえません。プラトンをごく教科書的に読んだだけでわかってしまう程度の混乱から抜け出せずにいる日本にも、い

ささかうんざりせずにはいられません。いま口にされている「改革」のほとんどは、観念論的な限界におさまるものばかりであり、いささかも現実的ではありません。観念論はきまって職人による一般原則の確認にとどまり、変化を作りだすことを回避しつづけるものだからです。ことによると、現代の日本は、悪しきプラトンの疾患を病んでいるのかもしれない。わたくしたちが生きている時代は、それを近代と呼ぼうが、あるいはポストモダンと呼ぼうが、いずれにせよ、たやすくは解消しがたい矛盾や葛藤や雑音にみちております。優れた統治者がいれば、あとはそれぞれの職人が自分の仕事にいそんでいればよいといったプラトンの分業的な秩序は、とうの昔に崩壊しています。人が、個人として、また社会の中で生きてゆくことに豊かさをそえるのは、まさにその矛盾であり、その葛藤であり、その雑音なのであります。予測しがたい起伏にみちた現実、それによく似たイメージの平坦な再現に置き換えられうるものでもなくなっています。また、イメージそのものも、何ものかの模倣につきることなく、それ自体が不実で把握しがたい現実の一部とさえなり始めています。それを巧みに避ける術を心得ている人間を、聡明とみなす時代ではなくなっているのです。

東京大学の修士号と博士号を手にしたばかりのみなさん。これは、いまさらあなたがたにいうべきこととも思えませんが、どうか、矛盾や葛藤や雑音や起伏の不在を理想化することだけは避けていただきたい。研究者の道をめざすにせよ、的確に選択された職業につこうとしておられるにせよ、あらゆる情報が齟齬もきたさずに円滑に流通する状態を理想化し、それに貢献することを仕事とする職人だけにはなってほしくない。プラトンが伝えるソクラテスの寝椅子のようなものに出会ったなら、プラトンを想起しつつ、プラトンとは異なる視点をこれに向けていただきたい。これを別れと祝福の言葉としてここにおられるすべての男女に捧げることで、学位記授与式の挨拶とさせていただきます。

平成13年(2001年)3月29日



総長就任にあたって



総長 佐々木 毅

昨年十二月に総長予定者に選任されて以来、多くの大学関係者から私は判で押したように真っ先に「御愁傷様です」という声をかけられた。これまでの総長の中でこれ程判で押したように「御愁傷様です」と言われた方は居なかったに違いないというのが、余り自慢にならない自らの境遇に対する最初の総括である。それは大学世界に漂うペシミズムの根深さを改めて印象づけるものであった。

その一方で、新聞などでは21世紀最初の東大総長といった形で紹介されることが珍しくなく、こちらの方には華々しさとまでは行かないにしても若干の御祝儀の雰囲気がある。相当に自惚れた言い方をすれば、世間の期待があるということかも知れない。もっと自惚れた言い方をすれば、政治にしろ経済にしろ、深い闇に覆われている日本の状況の中でせめて大学、それも東京大学が何か「一服の清涼剤」を提供してくれるという期待感があるということかも知れない。ここには世間に漂うペシミズムが見られる。

かくして私の総長職はペシミズムの大海の中で出発することになった。当然に事なかれ主義は通用しないと覚悟しなければならない。他方で、これだけペシミズムに取り巻かれると今更ペシミズムに耽っている暇がないという心理が働くし、そこでは船長は一片であってもオプティミズムを持たない限り勤まらないという判断に行き着く。これが今回の船出の心象風景である。

蓮實総長時代に日本の社会に起こった金融・経済危機は極めて衝撃的であった。それは歴史が平板な形で連続的に進行するのではなく、断絶と裂け目を伴いながら進むものであるという常識を確認したに過ぎないものであったが、そうした常識すら忘却してきた過去三十年、四十年の精神的陋習にとっては驚天動地の出来事の連続であった。しかも、この変化の帰趨は未だに見えてきていない。大学はこうした激変とどこまで無関係でいられるか、巨額の財政赤字を抱えた政府が所管する国立大学はどこまで馬耳東風でいられるか、これらの問題は大学人の頭上に重く垂れ込めた暗雲である。「今まで通りには行かない」という実感が大学関係者の中に既に深く浸透していることは、私に対して判で押したように発せられた「御愁傷様です」という言葉にはっきりと現れている。私は敗戦処理の、殿軍の部将のようなものだということらしい。

この心境は日本の大学が戦後「住み分け」構造の中で

曲がりなりにも - - 主観的には細々と - - 維持してきた研究や教育活動の基盤が脅かされるという感覚と結びついている。実際、入学試験が最大の国民的行事に成長したことを背景に大学がこうした「住み分け」構造に居を構え、自らの周辺に障壁をめぐらしてきたことは事実であろう。しかし、大学が今やこの「住み分け」構造の中に安住し続けることは諸条件の変化によって難しくなった。この二十年余り、世界中で起こったことを敢えて単純化するならば、それは大小の「住み分け」構造・障壁の崩壊と破壊であったように思われる。「住み分け」構造の自明性はなくなり、その説明責任が求められるようになった。問答無用という形で「住み分け」構造を擁護することは難しくなった。今や国家すらこの説明責任を免れなくなった。

四年前、蓮實総長は就任の際の文章において、組織としての東京大学の構造と機能を明らかにし、その意識化に基づいて「大学の意志」に基づく改革の必要性を力説されているが、このことは吉川、蓮實両総長がこうした趨勢を看取り、東京大学として独自の対応を考えられていたことを物語っている。私自身が研究科長時代に参加した「東京大学の経営に関する懇談会」もそうした発想を前提にしたものであり、そこで経営体制の主査として提案した事項の幾つかは既に実現を見ている。その意味では東京大学はそれなりに「住み分け」構造を超える道を模索してきたことは確認しておくべきである。

また、改めて述べる必要もない自明のことであるが、社会は大学にさまざまな課題との新たな取り組みを求めている。昨今の事例をあげれば「学力低下」問題は今や最大の国民的関心事であり、大学が無関心を装うわけにはいかない問題である。また、そもそも21世紀の展望を真面目に考えるならば、大学を上手に活用できない社会があらゆる面で衰亡を免れないことは今や自明の理というべきであろう。それも科学技術の民間への移転といったものに限られるものではない。つまり、社会は大学に対して入学試験の管理を超えた広範な役割を求めているのであって、何もその縮小を一方的に求めているわけではない。文科系においても法科大学院やビジネススクールが話題になっているように、大学という組織そのものは日本においても決して四面楚歌の状態にあるわけではない。つまり、大学を取り巻く問題の核心は従来とは異なった役割分担の線引きにあり、社会と大学との接点をより多面的、相互浸透的な形に作り替えることにあると思われる。若し大学関係者が社会の声を徒に恐れることなく、それと正対する勇気を持つならば、これは先の「住み分け」構造時代以上に大学の社会的存在感を高めることにつながる可能性を秘めている。そして国立大学の独立行政法人化問題の核心は、それが果たしてこうした大学に期待される大きな役割にとって適合的かどうか、社会が大学の活力を上手に引き出すのにふさわしい仕組みかどうかにかかっている。

目下の東京大学にとって独立行政法人化問題が最大のテ・マであるという説に私は反対である。それは応接し

なければならない重要な問題ではあるが、それ以上のものではない。最大のテーマは東京大学が研究教育の面で社会のさまざまな期待や要求にどれだけ応答する体制を準備できるか、必要な改革を行なうのに十分な協力体制を調達し続けることができるかにある。これは究極的には、東京大学があたかも一つの独立した法人のように行動することができるかどうかということにも帰結する。こうした発想そのものは既に吉川総長時代に表明されたものであって、決して私の新奇な目論見ではない。勿論、細部に至るまで文部省の規制の上に構築されてきたこれまでの仕組みをあたかも一つの法人であるかのような体制に再編成することは至難の業である。しかし、学内の随所においてそうした思考実験を始める時期に来ていることは明かである。教官も事務官もそれぞれに過去を括弧に入れて未来志向の思考実験を行なう時期に来ている。

総長の立場から敢えてジョン・F・ケネディ風に言わせてもらえば、「東京大学があなたに何をしてくれるかではなく、あなたが東京大学のために何をするのか」がそこでの主題である。こうした定式化に対しては批判があるかも知れない。しかし、組織と同様個人もまた「住み分け」だけに依拠するのではない説明責任を求められて然るべきである。こうした思考実験に基づく協力に対して、われわれ執行部が大学の組織としての独自性を外部に対して断固として擁護する任務を負っていることは改めて述べるまでもない。私としてはこの双務的な関係への信頼に基づいて東京大学が更に一歩動き出すことに期待をかけ、ペシミズムの大海の中でささやかなオプティミズムの灯火を掲げるべく挑戦したい。

依怙鼻肩と偏愛

退任にあたって

前総長 蓮 實 重 彦

これまで誰ひとりとしてその全容を目にした者はいないといわれている東京大学の「構造」と「機能」にどのようなかわりを持ってばよいのか、四年前のわたくしにとっては雲をつかむようなはなしでした。「総長」と呼ばれば涼しい顔で相槌をうちはするものの、それが自分のことだとわかには信じられず、そこに「東大」が凝縮されているはずもない本部庁舎八階の「総長室」へとはにかみもせず毎朝滑りこんでゆく自分にも、素直に慣れることはできませんでした。しかし、いつまでもこれは虚構だといいはっても問題は解決しないと自分にいきかせ、窓際の大きなテーブルを前にしてあれこれ思考をめぐらせてみました。ところが、あたりには中心を欠いたいくつもの円環が無方向にぐるぐるまわっているだけで、ときには何やらまがましい彗星のようなものがいきなり視界を横切ったりする。思わず首をすくめたことも、一度や二度ではありませんでした。

実際、まさかと嘆息するほかはない醜聞まがいの事件は、学内のいたるところで起こっていました。しかし、

わたくしを戸惑わせたのは、鉄拳をくわせればすみそうなそうした問題ではありません。例えば、邪悪なガラガラ蛇が跳梁しているというユタ州の砂漠で米軍がらみの突発事故が起こる。すると、それがたちどころに東京大学の問題になってしまうという現実に、虚をつかれる思いがしていたのです。スイスとフランスの国境地帯の地底に広がる巨大な実験装置が新たなプロジェクトに移行すべきか否かでもめているとき、それもまた東京大学の問題だということになる。マラッカ海峡に海賊が出没することさえ、東京大学の問題なのです。AITアジア工科大学の学長は、東京大学なしにその未来はないと真顔で断言される。かと思うと、ビデオショップに卑猥なビデオがでまわっているというニュースが飛び込んでくる。これもまた、東京大学の問題であり、そのかぎりにおいて、責任は総長ということになるのです。わたくしが脅えたり、腹を立てたりしたのは、だから、高級官僚の不祥事ばかりではありません。新聞紙面に大きく印刷された「東大寺」という活字に思わずドキリとしたこともしばしばでした。

そうした多様なできごとの織り上げる東京大学の限界を見きわめようにも、いったいどこに触れれば確かな感触がえられるのかは想像を超えておりました。東京大学総長として紹介され、それがまぎれもない真実であるかのように振る舞えたのは、海外にいたときだけだったかもしれません。

とはいえ、「構造」については、そのおよその姿は何とか見えてきます。細部の表情の微妙な偏差を超えて、基本的な骨組みのようなものは比較的はやい時期に理解できたのではないかと思います。ところが、その「機能」となると、これは皆目見当もつかない。大学の重要な「機能」の一つが若者たちの教育にあることは明らかでありながら、それを支える哲学が、それぞれの文化圏で必ずしも同じものとはいえないからです。教える側の教授選考の哲学もまちまちなのです。それを統一するとまではいわないにしても、せめて相互に翻訳可能なものとするところまではできるだろうか。しかし、大学院を含めれば教育に責任を持つ十を超える学部が、まあ言葉は悪いのですがあれこれ勝手気ままにやっていて、それが文化の違いだという口実のもとに広く容認されてしまう。多様性が大学にとって望ましい現象であるのは当然ですが、多様な部分が排他的に収縮してゆくと、それは限りなく雑多性に近づいてしまいます。その雑多性と多様性の案配にどのように責任をとることができるのか、これもほとんど対処不能な問題でした。しかし、雑多性から多様性へのゆるやかな移行が多くの方がたの理解によって実現され始めたことを素直に祝福したいと思います。

ある組織について、その「構造」と「機能」が明らかにされなければ、それがになっているはずの「意味」の把握さえ困難になります。しかし、ここで総長就任にあたって口にした言葉をくりかえすなら、東京大学は、わたくしの目に、その潜在的な資質を充分に発揮しているとは見えない組織でした。これは、制度の問題というよ

り意識の問題です。であるが故に、そこには無限の未来が広がっているはずだと信じながら、1500日近い歳月を総長室で孤独に送っていたのであります。その孤独を病的に昂じさせないために、開かれた未来をめざしている華やいだ細部が一つでも目に入れば、それに手をかざし、その変化を加速させようと心がけました。実際、ふとあたりを見まわすと、無性に人を惹きつけてやまないいくつもの輝かしい個性が、閉ざされた文化圏を超えて無造作にあたりに散在していました。そうした魅力的な男女の周辺には思ってもみない爽やかな風が吹きぬけ、あたりの光線がいつもと違い妙にまばゆかったり、かくわしい香りが漂っていたりする。「構造」も「機能」も把握しがたい東京大学は、そんなとき、不意に柔軟きわまりない表情におさまり、変化への潜在的な資質をかいまみさせてくれるのです。

そんな資質の柔らかさにつつまれている自分をふとみいだすとき、わたくしは快い驚きとともに、問題は細部にあるとつぶやきます。文脈を離脱した断片といたらいいのでしょうか、そうした魅力あふれる個体に遭遇すると、まるで嘘のようなたやすさで未来を確信することができたからです。それは、どこかしらフィクションめいた総長という職務に、誇らしい未知の輪郭を与えてくれました。実際、ある有力大学の学長が、めざましい才能の持ち主を東大にとられたとくやしそうにつぶやいたのを耳にすると、そのめざましい才能に一刻もはやく会わずにはいられなくなります。将来性豊かな女性研究者がハーバードからもどってきたと聞けば、その豊かな将来性をこの目で見ずにはいられませんが、そして、そのようにして設定されたいくつもの遭遇は、そのつどわたくしを勇気づけてくれる途方もなく貴重な体験でした。

そんなわけで、これはと思う方にお声をかけて、お忙しいとは知りつつ総長室までおいでいただき、お話を聞きながらその研究の先端部分を何とか理解しようとつとめました。優れた同僚たちは、こちらの意図を理解され、ぼつりぼつりとその研究について語り始める。すると、その言葉は、どれもこれもが驚くほどみずみずしく、人を惹きつけずにはおきません。そんなとき、わたくしは、東京大学はまぎれもない「生きもの」と確信し、その確信をもたらずものが総長という職務であるなら、その職務にあることの特権をとことん利用しようという気になりました。

わたくしが確かな感触でまさぐることのできたのは、だから「構造」でも「機能」でもなく、「生きもの」としての東京大学の素肌にほかなりません。「生きもの」であるかぎり、その表層にふと触れてみただけでみるみる元気になるし、また、扱い方ひとつでみじめにしぼみこんでしまう。そうした細部、あるいは断片を、わたくしは偏愛いたしました。人目には、ほとんど理由を欠いた依怙鼻屑と映ったかもしれませんが、しかし、人びとがごく抽象的に口にする総長の「イニシアティブ」とやらは、せんじつめれば依怙鼻屑にほかならない。そう居直ることができたのは、任期もなかばをすぎておりました。

優れた研究者が何人もいるはずなのに総体としてあまり元気にみえない集団があるかと思うと、ごくわずかな数の優れた人材がみごとなネットワークをたくりよせながら変化の契機をつくりだしているところもある。大学の生死とは、優秀な人材の多寡とはいっさい無縁であり、ほんのわずかな人の周辺につくりだされる知の有効な網状組織と、それが作動させる拡散の力学にほかなりません。そう実感しえたとき、改革のための制度改革がいかにむなしい時間とエネルギーの浪費であるかを理解することができたのです。たんなる制度改革は、原理として、依怙鼻屑をあらかじめ排除しているからです。

数年ごしの企画だった情報関係の大学院のアイデアが行きつまり、どうにも動きがとれなくなったときにも、その「構造」と「機能」を超えて、変化への感性豊かな何人もの同僚とお会いし、その方がたとの会話を通して、間違いなく何かができることと確信することができたのです。「情報学環」はそのようにして可能となりましたし、「UTフォーラム」の企画もそうした中から生まれたものにほかなりません。総長補佐に女性を加えてほしいと駄々をこねたのも、偶然の機会に偏愛の対象となった方がたを仲間に引き入れたいという依怙鼻屑の発現にほならず、男女雇用の機会均等といった言葉に促されたことではいささかもありません。実際、わたくしの懇願をあれこれ聞き入れてくださった方々は、東京大学に未知の快い微風を送りこんで下さいました。何かを確実に変化させたいくつもの微風 これには複数の事務官も含まれます に、感謝せずにはおられません。

そんな中で、どうしても忘れることができない方を一人だけ挙げさせていただきます。それは、当時、素粒子物理国際研究センターのセンター長だった折戸周治教授であります。だったと書かざるをえないことに、わたくしの筆はいまも乱れるのですが、何度か総長室を訪ねてこられた折戸さんのさりげない存在感と、何よりおしつけがましさを欠いたその言葉遣いとは、たちどころにわたくしを武装解除し、その基礎さえ学んだことのない素粒子物理学を偏愛の対象へと変貌させてくれました。それは、まぎれもなく東京大学の生死にかかわる問題だと認識することができたのです。折戸さんとの出会いがなければ また、折戸さんとはまったく異なる魅力の持ち主である戸塚宇宙線研究所長のめざましい業績がなければ わたくしも、当時の国際的な趨勢にしたがって物理学を軽視し、ひたすら生命科学路線を顕揚することになっていたかもしれません。おそらく、出張の過密な日程をさいてわざわざジュネーヴまで足をのばし、CERNの実験装置の威容に立ち会うことに旅程の一日を費やすことはなかったでしょうし、そのイタリア人の所長と、セリエAの試合について談笑しあうこともなかったはずなのです。

折戸さんとの出会いには、感謝以上の深い思いをささげずにはおられません。実際、彼の周囲には、いつも異なる風と、異なる照明と、異なる香りとが漂っていました。この方のためなら何でもしようというひそかな決意

を、はたして依怙鼻眞と呼ぶべきかどうかはわかりません。しかし、このような魅力的な研究者が東京大学を世界に向けて輝かせているのだと確信したことで、総長としてのわたくしの振る舞いは明らかに変化しました。折戸さんは、「生きもの」としての東京大学の総長という役割に目覚めさせてくれたのです。だというのに、カナダ極地での困難な実験をおえて帰国され、そろそろお目にかかれるだろうと期待していたやさきに、折戸さんは過労のため人事不整に陥ってしまったのです。

わたくしは、わたくしの生涯でただ一度、奇跡を祈りました。避けがたい運命として訪れた彼の死の知らせは、「生きもの」としての東京大学そのものに危機がせまったいるかのように、わたくしをうろたえさせました。その葬儀は、同じ時期に失ったわたくし自身の母の葬儀よりも遥かに大きな悲しみで、わたくしの心をしめつけました。また、同時に、折戸さんが世界のあらゆる場所で偏愛の風土を煽り立て、国際的な優れた研究施設の責任者による依怙鼻眞の対象となっていたことを知り、悲しみのうちにも救われる思いがしました。折戸さんのおかげで、わたくしが理想とする真の評価が、偏愛と依怙鼻眞にほかならないと確信できたからです。

総長室のわたくしが偏愛だの依怙鼻眞だのといったいかげわしい概念と真剣に戯れることができたのは、もちろん、副学長や総長補佐、それに事務局の方がたが東京大学をめぐる事態の客観的な解説を受け持ち、その戦略を周到にたてて下さったからにほかなりません。そうした支援に心からの謝意を表明させていただきます。佐々木毅総長のもとで、「生きもの」としての東京大学が、概念のより少ないいかげわしさとともに、さらなる活性化をとげることを祈っております。この知の空間には、人を不断に驚かしてやまぬ貴重な細部と断片が、誇らしげに散在しているからであります。

退任にあたって

前副学長 青山善充

副学長からの退任は、私にとって、同時に39年に及んだ東京大学の教職生活からの退場でもある。副学長としての2年間を鑑みると、- - 他人の評価は自ずから異なるにせよ - -、私としては、自己の能力の限りを尽くして東京大学のために精励した思いがある。結果についてはいくばくかのほろ苦さを感じつつも、今五体に満ち満ちてくるのは限りなき解放感である。このところ頬がゆるみっぱなしで、だらしがないと家人から注意される始末である。

しかし、この文章を書いている時点では、実のところゆっくり感傷に浸るまでもなく、年度末の様々な行事、新しい職場への荷物の引っ越し、久しく荒廃したわが研究と教育の庭への手入れが待っている。この2年間、私は研究や教育に打ち込む時間をほとんど持たず、これらに対して禁断症状ともいような餓えを覚えてきた。

昨年来「副学長を終えたら学業に復帰する」との私の宣言に対して、蓮實総長を初め、何人かの親しき友人から「本当に復帰できますか」と、さももう研究者としては使いモノにならぬといわんばかりの揶揄を頂戴した。相当期間のリハビリの必要は感じつつも、断固私は学業に復帰し、若い学生の教育に体当たりで取り組む決意である。私の新しい職場、成蹊大学法学部は、私のこのような願望を満たしてくれそうで、大いに満足している。

東京大学とその周囲の現況については、今さら何をか言わん。難局に船出する佐々木毅新総長、3人の副学長を初めとする東京大学の全教職員の方々に、心からなるエールを送って退場することにしたい。

退任の辞

前副学長 小林正彦

「平民万歳」

何事も格式張ることの苦手な一人の平民が副学長に任ぜられ、今また平民として研究室に戻るこの2年間を振り返ってみると、東京大学は、平民には住み難い所であるが、まだ住めない所ではないというのが素直な感想である。手続きさえ踏めば正当化されるという行政の常套手段がまかり通っていて、もはや「儀式」ではないかと思うほどの慣習に戸惑いながらも、何とか病気にもならず楽しく過ごせたのは、雑草のごとき平民であったことと、同じ平民の皆様の助けがあったからこそと心から感謝している。

伝統ある東京大学は、ともすれば19世紀の枠組みと慣習を後生大事に維持していて、新制大学制度に移行した直後の未熟な意識と形態に安住している。それでいて世界有数の大学であると数字を並べて悦にいつている。歴史の中では小さな虫のような存在でしかない東京大学が、脱皮もせず、ましてや変態もしない化石になろうとしている虫であることを自覚すべきである。沙羅双樹の花の色から理(ことわり)を悟り、プラトンの呪縛から解放され、平民のための科学をなす大学たならなければならないと思う。

最後まで言いたいことを言わせて戴き、ありがとうございました。

以上

≡ 一般ニュース ≡

総長の交代

3月31日付けで、退任された蓮實重彦前総長の後任として、先の総長選挙において選出された佐々木 毅 大学院法学政治学研究科教授が4月1日付けで、第27代総長に就任した。

佐々木 毅 (昭17 . 7 . 15生)

(任期: 平13 . 4 . 1 ~ 平17 . 3 . 31)



昭40 . 3 法学部卒業
昭53 . 11 教授 (法学部)
(出身地) 秋田県
(所属講座)
政治学史
(専門分野)
政治学・政治学史
研究内容 (代表的な著書や論文等)

「政治学講義」「プラトンの呪縛」「現代アメリカの保守主義」「マキアヴェッリの政治思想」

副学長の交代

4月1日付けで、小間 篤 大学院理学系研究科教授及び宮島 洋 大学院経済学研究科教授の両名が就任した。

小間 篤 (昭17 . 3 . 5生)

(任期: 平13 . 4 . 1 ~ 平15 . 3 . 31)



昭41 . 3 大学院工学系研究科修士課程修了
昭61 . 4 教授 (理学部)
(出身地) 東京都
(所属講座)
無機分析講座
(専門分野)
固体物性

研究内容 (代表的な著書や論文等)

積層人工物質の創製

「表面界面の電子状態」(丸善)

宮島 洋 (昭17 . 8 . 1生)

(任期: 平13 . 4 . 1 ~ 平15 . 3 . 31)



昭43 . 3 大学院経済学研究科修士課程修了
昭60 . 6 教授 (経済学部)
(出身地) 東京都
(所属講座)
現代経済
(専門分野)
財政学

研究内容 (代表的な著書や論文等)

「租税論の展開と日本の税制」(日本評論社) 「財政再

建の研究」(有斐閣) 「高齢化時代の社会経済学」(岩波書店)

総長特別補佐の就任

平成13年度から、総長室体制の強化として、総長特別補佐を加えることとなり、4月1日付けで廣渡清吾社会科学研究所教授が就任した。

廣渡 清吾 (1945 . 12 . 4生)



(任期: 平13 . 4 . 1 ~ 平15 . 3 . 31)
1968 . 3 京都大学法学部卒業
1991 . 4 教授 (社会科学研究所)
(出身地) 福岡県
(所属講座)
比較現代法部門
(専門分野)
ドイツ法・比較法社会論
研究内容 (代表的な著書や論文等)

「法律からの自由と逃避」(日本評論社) 「統一ドイツの法変動」(有伸堂)

部局長の交代

このたび、次のとおり部局長の交代があった。

| 部局名 | 新部局長 | 旧部局長 |
|-----|------|-------|
| 大・医 | 桐野高明 | (再任) |
| 大・文 | 佐藤慎一 | 田村毅 |
| 大・理 | 佐藤勝彦 | 小間篤 |
| 大・農 | 林良博 | (再任) |
| 大・薬 | 桐野豊 | 今井一洋 |
| 創域 | 河野通方 | 似田貝香門 |
| 地震研 | 山下輝夫 | 藤井敏嗣 |
| 社研 | 仁田道夫 | 廣渡清吾 |
| 社情研 | 廣井脩 | (再任) |
| 史料 | 加藤友康 | 石上英一 |
| 分生研 | 鶴尾隆 | (再任) |
| 宇宙線 | 吉村太彦 | 戸塚洋二 |
| 海洋研 | 小池勲夫 | 平啓介 |
| 先端研 | 南谷崇 | 岡部洋一 |

大学院医学系研究科・医学部

桐野 高明 (昭21. 7. 17生)

(任期: 平13. 4. 1 ~ 平15. 3. 31)



昭47. 3 医学部医学科卒業
平4. 10 教授 (医学部)
(出身地) 佐賀県
(所属講座)
臨床神経精神医学講座
(専門分野)
脳神経外科・脳血管障害
研究内容 (代表的な著書や論文等)

虚血性脳血管障害の機構の解明と治療法の開発

大学院人文社会系研究科・文学部

佐藤 慎一 (昭20. 9. 23生)

(任期: 平13. 4. 1 ~ 平15. 3. 31)



昭44. 6 法学部卒業
平5. 4 教授 (文学部)
(出身地) 神奈川県
(所属講座)
中国思想文化学講座
(専門分野)
近代中国思想史
研究内容 (代表的な著書や論文等)

「近代中国の知識人と文明」(東京大学出版会)

大学院理学系研究科・理学部

佐藤 勝彦 (昭20. 8. 30生)

(任期: 平13. 4. 1 ~ 平15. 3. 31)



昭49. 3 京都大学大学院理学研究
科博士課程修了
平2. 10 教授 (理学部)
(出身地) 香川県
(所属講座)
宇宙物理学
(専門分野)
宇宙物理学・宇宙論

研究内容 (代表的な著書や論文等)

真空の相転移と宇宙膨張、中性流相互作用と超新星爆発

「相対性理論」(岩波書店)

大学院農学生命科学研究科・農学部

林 良博 (昭21. 7. 12生)

(任期: 平13. 4. 1 ~ 平15. 3. 31)



昭44. 3 農学部卒業
昭50. 5 大学院農学系研究科単位
取得退学
平2. 6 教授 (農学部)
(出身地) 富山県
(所属講座)
比較動物医科学
(専門分野)

獣医解剖学・ヒトと動物の関係学

研究内容 (代表的な著書や論文等)

「獣医解剖学」(近代出版)、「イラストで見る犬学」(講談社)

大学院薬学系研究科・薬学部

桐野 豊 (昭19. 1. 22生)

(任期: 平13. 4. 1 ~ 平15. 3. 31)



昭47. 3 大学院薬学系研究科博士
課程修了
昭60. 10 教授 (九州大学薬学部)
(出身地) 愛媛県
(所属講座)
生体分子機能学講座
(専門分野)
神経生物物理学

研究内容 (代表的な著書や論文等)

学習・記憶の分子・神経機構

大学院新領域創成科学研究科

河野 通方 (昭19. 11. 19生)

(任期: 平13. 4. 1 ~ 平15. 3. 31)



昭48. 3 大学院工学系研究科博士
課程修了
昭62. 8 教授 (工学部)
(出身地) 山口県
(所属講座)
エネルギー変換システム大講座
(専門分野)
エネルギー変換及び航空宇宙推進工

学

研究内容 (代表的な著書や論文等)

燃焼、内燃機関、微少重力環境利用

「最新内燃機関」(朝倉書店)

地震研究所

山下 輝夫 (昭23. 5. 10生)

(任期: 平13. 4. 1 ~ 平15. 3. 31)

昭51. 3 大学院理学系研究科修了
平7. 5 教授 (地震研究所)

(出身地) 山口県

(所属講座)

地球計測部門

(専門分野)

理論地震学

研究内容 (代表的な著書や論文等)

「大地の躍動を見る (編著)」(岩波ジュニア新書)、震源の力学

史料編さん所

加藤 友康 (昭23. 8. 22生)

(任期: 平13. 4. 1 ~ 平15. 3. 31)



昭52. 3 大学院人文科学研究科修了

平8. 4 教授 (史料編さん所)

(出身地) 東京都

(所属講座)

古代史料部門

(専門分野)

日本古代史

研究内容 (代表的な著書や論文等)

「古代文書論」(共編著、東京大学出版会)

社会科学研究所

仁田 道夫 (昭23. 3. 1生)

(任期: 平13. 4. 1 ~ 平15. 3. 31)

昭53. 3 大学院経済学研究科博士
課程単位取得退学

平5. 4 教授 (社会科学研究所)

(出身地) 山口県

(所属講座)

附属日本社会研究情報センター

(ネットワーク型組織担当)

(専門分野)

労使関係論

研究内容 (代表的な著書や論文等)

「日本の労働者参加」(東京大学出版会)、「Knowledge Driven Work」(Oxford University Press)

分子細胞生物学研究所

鶴尾 隆 (昭18. 7. 11生)

(任期: 平13. 4. 1 ~ 平15. 3. 31)



昭42. 3 薬学部卒業

昭47. 3 大学院薬学系研究科修了

平元. 5 教授 (応用微生物研究所)

(出身地) 香川県

(所属講座)

分子機能・形成部門 細胞増殖研究

分野

(専門分野)

癌化学療法、細胞生物学

研究内容 (代表的な著書や論文等)

抗がん剤耐性と克服 アポトーシス、がん転移

社会情報研究所

廣井 脩 (昭21. 9. 7生)

(任期: 平13. 4. 1 ~ 平15. 3. 31)



昭44. 6 文学部卒業

昭50. 3 大学院社会学研究科修了

平4. 4 教授 (社会情報研究所)

(出身地) 群馬県

(所属講座)

情報行動部門

(専門分野)

社会心理学、災害社会学

研究内容 (代表的な著書や論文等)

「災害と日本人 巨大地震の社会心理」、「災害情報論」、「うわさと誤報の社会心理」

宇宙線研究所

吉村 太彦 (昭17. 4. 13生)

(任期: 平13. 4. 1 ~ 平15. 3. 31)

昭45. 9 シカゴ大学大学院物理学
科博士課程修了昭58. 6 教授 (高エネルギー物理学
研究所)

(出身地) 大阪府

(所属講座)

高エネルギー強相互作用第二部門

(専門分野)

素粒子物理学

研究内容 (代表的な著書や論文等)

熱浴中での量子力学および場の理論の研究、弱い相互作用のミュオン磁気能率への寄与の評価、宇宙物理学からの未知粒子アクションへの制限の評価等

海洋研究所

小池 勲夫 (昭19. 6. 25生)

(任期: 平13. 4. 1 ~ 平15. 3. 31)



昭49. 3 大学院理学系研究科修了

昭54. 7 教授 (海洋研究所)

(出身地) 東京都

(所属講座)

海洋化学部門生元素動態分野

(専門分野)

海洋生物地球化学

研究内容 (代表的な著書や論文等)

海洋における炭素・窒素の循環、海洋微生物の代謝過程、
海洋におけるコロイド有機物の動態

先端科学技術研究センター

南谷 崇 (昭21. 7. 11生)

(任期: 平13. 4. 1 ~ 平15. 3. 31)



昭44. 5 工学部卒業

昭46. 3 大学院工学系研究科修了

平元. 4 教授 (東京工業大学工学部)

平8. 10 教授 (先端科学技術研究センター)

(出身地) 愛知県

(所属講座)

情報システム大部門

(専門分野)

情報工学

研究内容 (代表的な著書や論文等)

「順序機械」(岩波書店)、「フォールトトレラントコンピュータ」(オーム社)、「フォールトトレラントシステムの構成と設計」(楨書店)

部局長の就任

このたび、大学院情報理工学系研究科の設置に伴い、その研究科長として、田中英彦情報理工学系研究科教授が就任した。

情報理工学系研究科

田中 英彦 (昭18. 1. 15生)

(任期: 平13. 4. 1 ~ 平15. 3. 31)

昭40. 3 工学部卒業

昭45. 3 工学系研究科修了

昭62. 7 教授 (工学部)

(出身地) 兵庫県

(所属講座)

電子情報システム大講座

(専門分野)

情報処理システム

研究内容 (代表的な著書や論文等)

計算機アーキテクチャ、非ノイマンコンピュータ、Parallel Inference Engine PIE64



任期を終えて

前大学院人文社会系
研究科長・文学部長
田村 毅

二年間の緊張した日々を終えた後で、まだ後ろを振り返る余裕がないというのが現在の正直な感想である。頭の片隅に残るしびれがとれ、ゆとりをもって教育研究に専念するには、いましばらくの時間が必要だろう。日々追われるように過ごし、麻痺した頭脳の底に、これでよいのだろうかという疑念がつねに執拗につきまってきた。社会からの要請に応えるべき大学教育の改革、競争的研究環境の整備と産学連携の強化、教育研究の評価、大学の国際化、等々、つぎつぎに提起される課題に対して、つねに疑念を抱きつつも、人文学本来の長期的視野にたって適正に対処しえたかどうか、さだかではない。教育の現場をになう組織の長としては、広い意味での教育環境の整備に力を尽くすことを任務としてきた。短期間にいくぶんかを加えるでも実現しえたことがあるとすれば、微力な学部長を支えていただいた事務部を含む同僚諸氏のおかげである。ここに深く感謝の「念」を捧げる。

退任にあたって

前大学院理学系研究科長・理学部長
小間 篤

2年前に学部長になった折に、予想もしなかった忙しい毎日でした。特に国立大学の法人化問題が具体化してからは、32国立大学の理学部長会議の議長として、「危うし！日本の基礎科学 国立大学の独立行政法人化の行方を憂う」と題する声明をまとめ、記者会見をして発表する一方、与野党の多くの国会議員、財界有力者、マスコミ関係者等に会って、国立大学、特に理学部の立場から、法人化する場合の問題点を訴えてきました。また日本の国立大学の実力を客観的データで示すべく、最近10年間に世界の有力大学から発表された学術論文数を調査し、東京大学を始め日本の国立大学がトップラングにある事実を明らかにしました。

多忙な毎日でしたが、ほぼ毎週開かれる学部長会議での活発な議論、他大学や文部省関係者との非公式な意見交換等は、私にとって大変貴重な経験でした。

法人化問題の行方はなお予断を許さない状況にあります。4月からは、副学長を拝命していますが、引き続き微力を尽くす所存ですので、どうぞよろしく願い申し上げます。

退任雑感

前大学院薬学系研究科長・薬学部長
今井 一 洋

「事故」が起こったとする。過去の類似事故を列举する、それらを比較する、数値化する。さらには事故の諸々の事象への波及効果に言及する。事故の原因を追及する、その防止策を提案する。それらにじっと聞き入り何も言わない人もいる。最後に総長がコメントする。このような対話が成り立つのは、人文社会学系と自然科学系の専門家が一同に会して、それぞれの立場より最善と思う発言をするからであろう。「事故」に限らず、東京大学が直面する諸問題に対する真摯な検討と対策の提言がこのような形で行い研究科長・学部長会議は今後も存続するに値する。法人化という未知への挑戦に当たって東京大学が揺らぐことのない基盤がここにあると信ずるからである。

一つの心配は、各研究科の適正規模についての検討が疎かになっていることだ。東京大学自らがこれを行うことがさらなる発展に繋がると考える。

以上、2年間の経験からの感想を述べた。蓮實総長の采配ぶりには感服の他なく敬意を表します。青山、小林両副学長にも学ぶところ多々あり感謝申し上げます。各研究科長・学部長からは文・理の両立が可能であることを教えられました。御礼申し上げます。

任期を終えて

前新領域創成科学研究科長
(人文社会系研究科教授)

似田 貝 香 門

柏キャンパスの試みについて何一つ知ることなく、文学部で研究教育に勤んでおりましたが、思いがけもなく、環境学の創設プロデューサーに指名されてから、その後、否応なく推進プロデューサーと、そして、文系の人間にとって、とても引き受けることができないと、固辞しつつつけた研究科長職を、時の状況によって引き受けざるをえなかったときから、「この研究科の東京大学での役割は何か」ということを考えると、毎日が苦しみと苦悩の日々でありました。特に、情報学環・学府が創設されてからは、一層厳しいものでした。しかし、東京大学の教職員の励ましと、ご協力を得て、漸く研究科を創立の軌道に乗せることができたかと思っております。離任時に漸く、新領域創成科学研究科の生きる道もどうやら私の心には描けるようになって参りました。寄り道であったかもしれなけれど、誰も経験することができなかった、貴重な時を、与えられた、と感謝しております。

退任にあたって思うこと

前地震研究所長
藤井 敏 嗣

今更ではあるが、無理を通してでも1期で終わるべきだったと思う、この頃である。2期目になって、有珠火山、三宅島火山の噴火に続き、鳥取地震、芸予地震と大きな事象があったにもかかわらず、研究者としてではなく、管理者の立場からの対応に終始せざるを得なかったからである。

もっとも、この4年間、専門を異にする多くの優れた方々に接する機会を与えられたことは異文化との遭遇という意味でも大変有益であった。しかし、省庁再編や法人化への流れの中で、部局運営と大学行政に汲々とし、研究から遠ざかってしまった4年間でもあった。

大学の自律的運営を貫くためには、部局長とは別に、経営センスのある研究者を発見・教育し、大学中枢に頭脳集団を作り上げるシステムティックな努力が必要だと思う。重要な点は、そのまま経営のプロにしてしまわないことであろう。適切なりハビリ制度を設けて、研究者へと復帰する道筋を用意する必要がある。そういう人材が育っていれば、大学の難局も、うまく乗り切ることができると思うのは非力であった元部局長の繰り言であろうか。

改革と外圧

前社会科学研究所長
廣 渡 清 吾

所長としての3年間、研究所の固有の課題に取り組むことと同時に、大学全体の帰趨に関わる議論に参加することが次第に重要な仕事になった。経営懇、設置形態の検討会、国立大学制度研究会、そしてUT21会議などである。附置研究所のあり方を考え、つぎの展望を拓く議論は、国立大学のあり方とももちろん密接に関わりあうが、後者の検討はいうまでもなく独自の課題であった。一方で大学の内発的改革の努力と他方で行革を起動力とする法人化の外圧への対応の両者を新たな大学の自治と学問の自由の論理の下に結合させようと試みてきたのがこの間の議論の軸心であったように思われる。外圧としての法人化問題はいよいよまったなしの時期に入りつつある。東京大学のこれまでの議論の軸心をずらすことなく、社会的に説得力のある大学の展望を適時に打ち出していくことがますます求められている。佐々木毅新総長のもとで、気持ちを新たにしていって微力を尽くしたいと思う。

退任にあたって

前史料編さん所長
石 上 英 一

所長室の棚を見ると、教授会などで教官に配布した資料の厚さは、前任所長が前々所長の3倍、私が前所長の2倍余。この6年間で情報量が6倍以上になったことがわかる。所長室での仕事の量も以前より格段に増えた。それでも、激動の学内外情勢を的確に伝え、研究所の発展策を講じることができたかと反省する。前近代史料の研究・編纂という学術的使命の遂行を大学の環境の変化の中にあっても発展させ、百年以上続いている史料編纂という伝統の基礎の上に新しい時代に相応しい研究事業を展開するという所信を教職員の前で幾たびか語ったが、その課題が前進させられることに期待している。

任期中、「前近代日本の史料遺産プロジェクト」という中核的研究拠点形成プログラムが採択され、歴史情報研究の拠点作りのしごとができた。忘れていきそうな研究のやり方（私の専門は日本古代史。最近の関心は奄美諸島史）をなんとか引きとめようという2年間であったが、あと4年続くプログラムで研究復帰ということにしたい。

大学に学べ

前宇宙線研究所長
戸 塚 洋 二

昔、日本の産業が盛んなとき、産業人は大学の教育を批判して、教育は大学に任せられないから自分たちで行うといった。日本の産業が斜陽になったとき、産業人は大学を批判して、新しい産業を興せない研究教育をやっているようではだめだ。産業人がアメリカを手本としたように、大学人もアメリカの大学制度をお手本にせよという。これでは、大学も産業と同じく、常にアメリカ追従の運命をたどるだけではないか。現在、大学の研究、とりわけ自然科学の研究成果は世界でも屈指であり、大学人は産業人よりよほど元気である。ところが、産業人は大学人を批判するのみで、元気な大学に学ぼうとしないのは驚くべきことである。教育に関する定量的な指標があるかどうか、あるいは日本の大学教育の指標が世界に占める位置がどうなのかは、寡聞にして知らない。しかし、現在の産業人を教育したのも大学人であるから、反省すべき点が多々あることは確かである。

海洋研所長退任に当たって

前海洋研所長
平 啓 介

検見川キャンパスへの移転、大部門への改組、大学院海洋学課程の開設、淡青丸の代船建造など多くの課題がありました。1期目の2年間はその1つも実現しませんでした。平成12年度に従来の16小部門から6大部門への改組と海洋環境研究センターの設置が決まりました。また、平成13年度から新領域創成科学研究科環境学専攻に6部門、3センターから12名の教授・助教授が協力講座に参画し海洋学全般を教育することになりました。在任中の4年間、研究所や研究船の公開と講演会を7月20日の海の日に開催しました。文学部との共催で白鳳丸洋上セミナーも始まりました。

「変わる東京大学」に魅力を持ちました。一方、附置研究所の役割は十分には認識されていないように感じました。在任中は連日のように会合があり、体調の維持に気を使いましたが、リハビリに努めてマイペースで研究に没頭することが目下の夢です。

脆性破壊

前先端科学技術研究センター長
岡 部 洋 一

東京大学は法人化の嵐に巻き込まれております。この嵐は、戦後に培われてきた成功体験に満足し、機動性を失ない、いわば脆性破壊のフェーズに入りつつあり、結果として社会の閉塞感を生み出しているあらゆる巨大組織に突き付けられつつある改革への要求かと思われま。

しかし、大学に対しては、自力で改革案が提案できるのならばそれを待ちましよう、と若干の猶予が与えられたと思いますが、今迄の法人化の議論の結論は乱暴に言えば、「前とほぼ同じ体制、身分は保障、しかもより多くの経常的予算」ということかと思ひます。

これを表面的に理解された場合の社会からの反動を考えると恐ろしいものがあります。予想される最悪の応答は、「自力で改革案が作成できないのならばトップダウンで改革しましよう」といったものです。

もう遅いかもかもしれませんが、今後は一教官として、少しでも多くの東大構成員の方々に、このような認識をお伝えし、真に社会に受け入れられるような改革が大学内部から達成できるよう微力を尽くしたいと思ひております。

卒業式行われる

平成12年度卒業式が、3月28日(水)に、東京国際フォーラム ホールAにおいて挙行された。式には、約2,620人の卒業生(卒業者数3,430人)と、その父母など約3,100人が出席した。

蓮實総長をはじめ、青山・小林両副学長・附属図書館長・当該学部の学部長・代表教官・事務局長・来賓の大韓民国ソウル国立大学 李基俊総長が壇上に列席し、奏楽の後、10時10分開式となった。

本年は、卒業生全員が一堂に会すことのできるよう、初めて学外の施設を利用して東京国際フォーラム ホールAで行われ、父母の一部も入場した。また、父母控室であるホールBにはスクリーンを設置し、ホールAでの式典の様態を放映した。

式は、まず音楽部管弦楽団による、モーツァルト作曲の「フィガロの結婚 序曲」が演奏され、壇上列席者の紹介があった後、蓮實総長から、各学部卒業生代表に学位記が授与された。次に、音楽部コーラルアカデミーによる学生歌「足音を高めよ」の合唱の後、蓮實総長から卒業生に約25分間にわたって告辞が述べられた。続いて、法学部卒業生 市原将樹さん、理学部卒業生 杉山昌広さんから卒業生代表挨拶があり、来賓の李基俊総長から約20分間にわたり韓国語で挨拶をいただいた後、最後に音楽部管弦楽団の演奏により、全員による「蛍の光」の斉唱をもって、11時40分に閉式となった。

学位記授与式行われる

平成12年度学位記授与式が、3月29日(木)に、大講堂(安田講堂)において挙行された。式には、約1,740人の修了者(修了者数3,443人(修士課程2,470人、博士課程973人))と、その父母など約1,210人が出席した。

本年の学位記授与式も、昨年度同様に父母控室である法文2号館31番教室及び文学部3番大教室にスクリーンを設置し、大講堂での式典の様態を放映した。

蓮實総長をはじめ、青山・小林両副学長・附属図書館長・各研究科委員会委員長・各研究所長・事務局長が壇上に列席し、10時開式となった。



式は、まず音楽部管弦楽団による、バッハ作曲の「管弦楽組曲第一番」が演奏され、壇上列席者の紹介があった後、蓮實総長から、各研究科の修士及び博士課程の修了者代表に、学位記が授与された。

続いて、蓮實総長から修了者に約25分間にわたって告辞が述べられ、11時13分に閉式となった。

なお、式終了後、正午まで大講堂を開放した。

大学院学則の一部改正

東京大学大学院学則

理学系研究科情報科学専攻並びに工学系研究科機械情報工学専攻、電子情報工学専攻、計数工学専攻及び情報工学専攻を改組転換し、情報理工学系研究科が設置されることに伴い、所要の改正を行ったものである。

附 則

(施行期日)

第1条 この規則は、平成13年4月1日から施行する。

(理学系研究科の経過措置)

第2条 平成13年3月31日以前に理学系研究科情報科学専攻の修士課程又は博士後期課程に入学し、引き続き在学する者については、なお従前の例による。

2 平成13年3月31日以前に理学系研究科情報科学専攻に入学した大学院研究生で、引き続き在学する者については、平成13年4月1日から情報理工学系研究科コンピュータ科学専攻に所属するものとする。

(工学系研究科の経過措置)

第3条 平成13年3月31日以前に工学系研究科機械情報工学専攻、電子情報工学専攻、計数工学専攻又は情報工学専攻の修士課程又は博士後期課程に入学し、引き続き在学する者については、なお従前の例による。

2 平成13年3月31日以前に工学系研究科機械情報工学専攻、電子情報工学専攻、計数工学専攻又は情報工学専攻に入学した大学院研究生で、引き続き在学する者については、平成13年4月1日から情報理工学系研究科数理情報学専攻、システム情報学専攻、電子情報学専攻又は知能機械情報学専攻に所属するものとする。

学位規則の一部改正

東京大学学位学則

情報理工学系研究科が設置されることに伴い、所要の改正を行ったものである。

附 則

この規則は、平成13年4月1日から施行する。

大学院情報理工学系研究科規則の制定

平成13年度から大学院に情報理工学系研究科が設置され、同年度から学生を受け入れることに伴い、本規則を制定したものである。

東京大学大学院情報理工学系研究科規則

(目的)

第1条 この規則は、東京大学大学院学則(以下「学則」という。)中、各研究科において定めるように規定されている事項及び東京大学大学院情報理工学系研究科(以下「本研究科」という。)において必要と認める事項について定めることを目的とする。

2 本研究科における教育課程、試験、入学及び修了等については、この規則に定めのあるもののほか、本研究科委員会(以下「委員会」という。)において、各専攻会議の議を経て、これを定める。

(修士課程の修了要件)

第2条 修士課程の修了要件は、学則第5条第1項の定めるところによる。ただし、在学期間に関しては、優れた業績を上げた者については、特例として1年以上在学すれば足りるものとする。

2 前項のただし書の特例の適用に関し必要な事項は、別に定める。

(博士後期課程の修了要件)

第3条 博士後期課程の修了要件は、学則第6条第1項の定めるところによるものとし、本研究科で定めた所要科目を20単位以上修得しなければならない。ただし、在学期間に関しては、特に優れた研究業績を上げた者については、特例として次の各号に掲げる年数以上在学すれば足りるものとする。

(1) 修士課程に2年以上在学し当該課程を修了した者
1年

(2) 前条第1項ただし書の規定による在学期間をもって修士課程を修了した者

修士課程における在学期間を含めて3年

(3) 学則第16条第2項第3号の規定により入学した者
1年

2 前項ただし書の特例の適用に関し必要な事項は、別に定める。

(教育課程)

第4条 各専攻の授業科目の履修及び単位については、別表の定めるところによる。ただし、委員会において、各専攻会議の議を経て、別段の定めをすることができる。

2 授業科目の単位数は、講義については毎週1時間、演習(輪講を含む。)については毎週2時間、実験又は実習については毎週3時間、各15週の授業時間をもって1単位とする。

(履修方法)

第5条 学生は、指導教官の指示によって授業科目を履修し、必要な研究指導を受けるものとする。

第6条 修士課程においては、指導教官の許可を得て、次の各号に掲げる科目を修得した場合は、別に定める単位数の限度内で、これを修士課程の単位とすることができる。

(1) 学部の科目

(2) 他の専攻又は研究科(学際情報学府を含む。次条において同じ。)の科目

第7条 博士後期課程においては、指導教官の許可を得て、次の各号に掲げる科目を修得した場合は、別に定める単位数の限度内で、これを博士後期課程の単位とすることができる。

(1) 学部の科目

(2) 修士課程の科目

(3) 他の専攻又は研究科の科目

2 修士課程において、修了に必要な単位を超えて修得した単位は、指導教官の許可を得て、10単位を限度として、博士後期課程の単位数に加えることができる。

(他の大学の大学院又は研究所等における研究指導)

第8条 学則第12条に定める他の大学の大学院又は研究所等における研究指導は、指導教官の申請に基づき、委員会の議を経て、これを許可するものとする。

2 前項に定めるもののほか、他の大学の大学院又は研究所等における研究指導に関し必要な事項は、別に定める。

(履修科目届及び受験届)

第9条 学生は、授業科目を履修しようとするとき又は履修した授業科目について単位を修得しようとするときは、指定の期間内に所定の様式により届け出なければならない。

(試験)

第10条 試験は、学期末又は学年末に行う。ただし、担当教官は、平常の成績又は報告をもって試験に代えることができる。

2 前項のほか、委員会が特に必要と認めた場合は、追試験を行うことができる。

(学位論文)

第11条 学生は、指導教官の指導を受けて、指定の期間内に学位論文を委員会委員長に提出するものとする。

(最終試験)

第12条 最終試験は、所要科目及び単位を修得し、必要な研究指導を受け、かつ、学位論文を提出した者について行う。

2 最終試験の期日及び試験の方法については、あらかじめ発表する。

(学位の授与)

第13条 学則第5条第1項に定める修了要件を満たした者には、修士(情報理工学)の学位を授与する。

第14条 学則第6条に定める修了要件を満たした者には、博士(情報理工学)の学位を授与する。

(所属専攻の変更)

第15条 所属専攻の変更は、委員会において特別の事情があると認める者に限り、委員会の議により、これを

許可することができる。

- 2 所属専攻を変更した者の変更後の専攻の在学期間は、変更前の在学期間と通算する。
- 3 所属専攻を変更した者の変更前の専攻において修得した単位は、専攻会議の認定により、第4条に規定する単位に算入することができる。

(入学資格)

第16条 修士課程に入学することのできる者は、学則第16条第1項(第4号を除く。)の定めるところによる。

- 2 博士後期課程に入学することのできる者は、学則第16条第2項各号の定めるところによる。
- 3 前項の場合において、学則第16条第2項第3号に規定する資格要件を認定する基準は、別に定める。

(再入学)

第17条 修士課程又は博士後期課程を中途退学した者で、当該課程に再入学を志願する者については、学年の始め又は学期の始めに限り、委員会の議を経て、入学を許可することができる。

- 2 再入学者は、退学前に所属した専攻に所属するものとする。
- 3 再入学者の在学期間は、委員会の議により、これを定める。
- 4 再入学者が退学前の専攻において修得した単位については、第15条第3項の規定を準用する。

(修士入学)

第18条 本学大学院において修士の学位を得た者で、更に修士課程に入学を志願する者の選抜については、新たに入学を志願する者の例による。ただし、この場合においては、委員会の議により、入学試験の一部を免除することができる。

- 2 前項により入学した者については、委員会の議により、在学期間を1年とすることができる。
- 3 第1項により入学した者が前に在学した専攻において修得した単位は、専攻会議の認定により、第4条に規定する単位に算入することができる。

(博士入学)

第19条 本学大学院において博士の学位を得た者で、更に博士後期課程に入学を志願する者の選抜については、前条第1項の規定を準用する。

- 2 前項により入学した者については、委員会の議により、在学期間を2年とすることができる。
- 3 第1項により入学した者が前に在学した専攻において修得した単位は、専攻会議の認定により、第4条に規定する単位に算入することができる。

(転入学及び転科)

第20条 学則第23条に定める転入学及び第24条に定める転科の受け入れについては、別に定める。

(特別研究学生)

第21条 学則第32条に定める特別研究学生の受け入れは、当該学生の所属する大学の大学院又は研究科等の申請に基づき、委員会の議を経て、これを許可するものとする。

- 2 前項に定めるもののほか、特別研究学生の受け入れに関し必要な事項は、別に定める。

(大学院研究生)

第22条 大学院研究生については、学則及び東京大学大学院研究生規則によるもののほか、その取扱いの細目については、本研究科において別に定める。

附 則

この規則は、平成13年4月1日から施行する。

別表 情報理工学系研究科授業科目（修士課程及び博士後期課程）

コンピュータ科学専攻

| 授 業 科 目 | 単位数 | 授 業 科 目 | 単位数 |
|----------------|-----|----------------|-----|
| 数値解析論 | 2 | バイオ情報処理特別講義 | 2 |
| 自然言語処理システム論 | 2 | 学術情報データベース特論 | 2 |
| 分散並列計算論 | 2 | 知能コンピューティング特論 | 2 |
| 計算システム検証論 | 2 | エージェントシステム特論 | 2 |
| コンピュータセキュリティ特論 | 2 | コンピュータ科学特別講義 | 2 |
| アルゴリズム論 | 2 | コンピュータ科学特別講義 | 2 |
| 分散システムソフトウェア | 2 | コンピュータ科学特別講義 | 2 |
| ビジュアル情報論 | 2 | コンピュータ科学特別講義 | 2 |
| 計算モデルと計算機構 | 2 | コンピュータ科学特別講義 | 2 |
| メディア情報学 | 2 | コンピュータ科学修士輪講 | 2 |
| 計算機言語システム論 | 2 | コンピュータ科学修士輪講 | 2 |
| コンピュータグラフィックス | 2 | コンピュータ科学修士特別研究 | 6 |
| VLDB論 | 2 | コンピュータ科学修士特別研究 | 6 |
| ゲノムデータベース特論 | 2 | コンピュータ科学博士輪講 | 2 |
| ゲノムデータベース特論 | 2 | コンピュータ科学博士輪講 | 2 |
| DNA情報解析特論 | 2 | コンピュータ科学博士輪講 | 2 |
| DNA情報解析特論 | 2 | コンピュータ科学博士特別研究 | 4 |
| ゲノム機能情報解析特論 | 2 | コンピュータ科学博士特別研究 | 4 |
| システム生命情報学特論 | 2 | コンピュータ科学博士特別研究 | 4 |

〔備考〕

- 1 修士課程においては、コンピュータ科学修士輪講、及びコンピュータ科学修士特別研究、を含めて30単位以上履修しなければならない。
- 2 博士後期課程においては、コンピュータ科学博士輪講、及びコンピュータ科学博士特別研究、を含めて20単位以上履修しなければならない。

数理情報学専攻

| 授 業 科 目 | 単位数 | 授 業 科 目 | 単位数 |
|-----------|-----|-------------|-----|
| 確率統計情報論 | 2 | 数理情報学講究 | 2 |
| 確率過程論 | 2 | 数理情報学特別講義 | 2 |
| 現代情報理論 | 2 | 数理情報学特別講義 | 2 |
| 連続情報論 | 2 | 数理情報学特別講義 | 2 |
| 非線形現象論 | 2 | 戦略型IT特別講義 | 2 |
| 数値計算論 | 2 | 数理情報学輪講 | 2 |
| 離散情報論 | 2 | 数理情報学輪講 | 2 |
| 数理構造論 | 2 | 数理情報学修士特別研究 | 6 |
| 応用数理学 | 2 | 数理情報学修士特別研究 | 6 |
| 応用幾何情報論 | 2 | 数理情報学博士特別研究 | 4 |
| プログラム構造論 | 2 | 数理情報学博士特別研究 | 4 |
| ソフトウェア構成論 | 2 | 数理情報学博士特別研究 | 4 |
| 応用経済工学 | 2 | | |

〔備考〕

- 1 修士課程においては、数理情報学輪講、及び数理情報学修士特別研究、を含めて30単位以上履修しなければならない。
- 2 博士後期課程においては、数理情報学博士特別研究、を含めて20単位以上履修しなければならない。

システム情報学専攻

| 授 業 科 目 | 単位数 | 授 業 科 目 | 単位数 |
|-------------|-----|---------------|-----|
| 物理情報論 | 2 | システムアーキテクチャ論 | 2 |
| 物理情報デバイス論 | 2 | システム情報学特別講義 | 2 |
| 信号処理特論 | 2 | システム情報学特別講義 | 2 |
| 計測制御システム論 | 2 | システム情報学特別講義 | 2 |
| バイオサイバネティクス | 2 | 戦略型IT特別講義 | 2 |
| システム情報基礎論 | 2 | システム情報学輪講 | 2 |
| システム制御論 | 2 | システム情報学輪講 | 2 |
| 動的システム論 | 2 | システム情報学修士特別研究 | 6 |
| 認識システム特論 | 2 | システム情報学修士特別研究 | 6 |
| 画像システム特論 | 2 | システム情報学博士特別研究 | 4 |
| 行動システム特論 | 2 | システム情報学博士特別研究 | 4 |
| 人工現実感特論 | 2 | システム情報学博士特別研究 | 4 |
| 計算システム特論 | 2 | | |

〔備考〕

- 1 修士課程においては、システム情報学輪講、及びシステム情報学修士特別研究、を含めて30単位以上履修しなければならない。
- 2 博士後期課程においては、システム情報学博士特別研究、を含めて20単位以上履修しなければならない。

電子情報学専攻

| 授 業 科 目 | 単位数 | 授 業 科 目 | 単位数 |
|---------------|-----|-------------|-----|
| 計算機構成論 | 2 | コンピュータビジョン | 2 |
| 計算機アーキテクチャ | 2 | 画像処理論 | 2 |
| オートマトンと言語 | 2 | インタフェース構成論 | 2 |
| 並列分散プログラミング | 2 | 情報視覚化 | 2 |
| データベース工学 | 2 | 知識コミュニケーション | 2 |
| 情報システム開発論 | 2 | 交通エレクトロニクス | 2 |
| 信頼性工学 | 2 | 電子情報学特別講義 | 2 |
| 情報通信システム特論 | 2 | 電子情報学修士輪講 | 2 |
| 符号理論 | 2 | 電子情報学修士輪講 | 2 |
| トラヒック理論 | 2 | 電子情報学修士特別研究 | 5 |
| ネットワークアーキテクチャ | 2 | 電子情報学修士特別研究 | 5 |
| インターネット工学 | 2 | 情報機器学特論 | 2 |
| 情報セキュリティ | 2 | 情報機器学特論 | 2 |
| 映像メディア学 | 2 | 電子情報学博士特別研究 | 4 |
| 音声言語情報処理 | 2 | 電子情報学博士特別研究 | 4 |
| 言語コミュニケーション | 2 | 電子情報学博士特別研究 | 4 |
| パターン認識 | 2 | | |

〔備考〕

- 1 修士課程においては、電子情報学修士輪講、及び電子情報学修士特別研究、を含めて30単位以上履修しなければならない。
- 2 博士後期課程においては、電子情報学博士特別研究、を含めて20単位以上履修しなければならない。

知能機械情報学専攻

| 授 業 科 目 | 単位数 | 授 業 科 目 | 単位数 |
|------------|-----|---------------|-----|
| 知能機構論 | 2 | ヒューマンインタフェース | 2 |
| 知能制御論 | 2 | 脳型情報機械論 | 2 |
| 知能情報論 | 2 | 生体情報論 | 2 |
| 知能メカトロニクス | 2 | 生体力学 | 2 |
| 知能ソフトウェア論 | 2 | 神経行動学 | 2 |
| 知能機械構成論 | 2 | 知能機械情報学特別講義 | 2 |
| ロボティクス | 2 | 知能機械情報学演習 | 2 |
| マイクロシステム | 2 | 知能機械情報学修士輪講 | 2 |
| リアルタイムシステム | 2 | 知能機械情報学修士輪講 | 2 |
| エージェントシステム | 2 | 知能機械情報学修士特別研究 | 6 |
| 生命体システム | 2 | 知能機械情報学修士特別研究 | 6 |
| 医療福祉システム | 2 | 知能機械情報学博士特別研究 | 4 |
| 複合現実感システム | 2 | 知能機械情報学博士特別研究 | 4 |
| 人間機械情報論 | 2 | 知能機械情報学博士特別研究 | 4 |

〔備考〕

- 1 修士課程においては、知能機械情報学修士輪講、及び知能機械情報学修士特別研究、を含めて30単位以上履修しなければならない。
- 2 博士後期課程においては、知能機械情報学博士特別研究、を含めて20単位以上履修しなければならない。

≡ キャンパスニュース ≡

平成13年度入学者数決まる

平成13年度新入生の人数は、次のとおりである。

| 科 類 | 入学定員 | 合 格 者 数 | | | 入 学 辞退者数 | 入学者数 | 募集人員 との 差 | 定員外の入学者数 | | 入学者総数 |
|------|--------------------|--------------------|---------------|--------------------|--------------|--------------------|-----------------|--------------|---------------|--------------------|
| | | 一般選抜 | 特別選考 (第2種) | 合 計 | | | | 国費留学 生等 | 特別選考 (第1種) | |
| 文科一類 | 605 (605) | 606 (606) | 6 (6) | 612 (612) | 2 (1) | 610 (611) | +5 (+ 6) | 3 (3) | 2 (1) | 615 (615) |
| 文科二類 | 365 (365) | 366 (367) | 1 (5) | 367 (372) | 0 (0) | 367 (372) | +2 (+ 7) | 3 (4) | 3 (3) | 373 (379) |
| 文科三類 | 495 (495) | 496 (497) | 4 (4) | 500 (501) | 2 (1) | 498 (500) | +3 (+ 5) | 7 (6) | 2 (2) | 507 (508) |
| 理科一類 | 1,147 (1,147) | 1,156 (1,155) | 4 (3) | 1,160 (1,158) | 9 (9) | 1,151 (1,149) | +4 (+ 2) | 21 (18) | 5 (5) | 1,177 (1,172) |
| 理科二類 | 551 (551) | 558 (559) | 2 (2) | 560 (561) | 6 (4) | 554 (557) | +3 (+ 6) | 0 (1) | 2 (1) | 556 (559) |
| 理科三類 | 90 (90) | 90 (90) | 0 (1) | 90 (91) | 0 (0) | 90 (91) | 0 (+ 1) | 0 (0) | 0 (0) | 90 (91) |
| 合 計 | 3,253 (3,253) | 3,272 (3,274) | 17 (21) | 3,289 (3,295) | 19 (15) | 3,270 (3,280) | +17 (+ 27) | 34 (32) | 14 (12) | 3,318 (3,324) |

(注) 1.()内は、昨年度を示す。

2. 国費留学生等の人数には、国費留学生の他に政府派遣留学生、日韓共同理工系学部留学生を含む。

≡ 部局ニュース ≡

大学院薬学系研究科「医薬経済学」及び「創薬理論科学」寄附講座設立記念講演会開催について

3月15日（水）に大学院薬学系研究科において、4月1日付けで設立される「医薬経済学寄附講座」及び「創薬理論科学寄附講座」の設立記念講演会が開催された。今井研究科長から両講座とも本大学にはなかった新しい分野を開拓しようとするものであるとの挨拶の後、津谷喜一郎氏（医薬経済学寄附講座担当客員教授）から「医薬経済学の構造と展望 clinical evidenceとeconomic evidence」及び藤野政彦氏（創薬理論科学担当客員教授）から「遺伝子情報と創薬科学」と題する講演が薬学系研究科記念講堂において行われた。多数の出席者は大変強い印象を受け、大きい反響があった。

講演終了後、山上会館にて120名余が参加の祝賀会が開催され、蓮實総長をはじめ「医薬経済学講座」にご寄附頂いた日本製薬工業協会会長・永山治氏、「創薬理論科学講座」にご寄附頂いた武田薬品工業株式会社創薬研究本部長・隅野靖弘氏、文部科学省高等教育課長・村田貴司氏及び厚生労働省大臣官房審議官・鶴田康則氏から、それぞれ挨拶並びに祝辞を頂き、大変な賑わいの中、会を終えた。

両寄附講座を通しての薬学系研究科の社会に対する貢献に、各界から大きい期待が寄せられていることが感じられた。



（大学院薬学系研究科・薬学部）

社会科学研究所国際シンポジウム開催される

第13回社研国際シンポジウム「『国際化』・『冷戦』以降 - 国際秩序の変容と日本」(Japan and the Transforming International Order : Bilateral Relations, Regional Arrangements, and Global Regimes) は、1990年代の日本を中心とした国際政治経済の秩序変動をとらえる目的で、内外20名余の研究者を集めて予定通り開催され、無事終了した。参加者は殆ど、このプロジェクトの関係者であったが、学内外からもコメンテーター等で参加をいただき、大変に有益であった。

特に、90年代の日本の対外政策、日本のアジアや日本の国際組織に関して、参加者の間で、主催者の予定を超えた問題関心や認識の一致があり、それだけに、議論も活発なものとなった。また、12日の夕方と13日の午前の今後の方針を話し合う場では、参加者一同、今後の早期のプロジェクトの完成と出版に非常な熱意を示し、いずれも、予定時間を遥かに超えた会合となった。



（社会科学研究所）

≡ 掲示板 ≡

新緑の猪ノ川溪谷へ

科学の森教育研究センター千葉演習林からのお知らせ

通常、科学の森教育研究センター千葉演習林敷地内の立入りは許可制になっておりますが、新緑のシーズンを迎えるにあたり、猪ノ川溪谷の一部を以下の要領で一般に公開いたします。猪ノ川溪谷とすがすがしい新緑をお楽しみ下さい。また、森林や林業に関する研究の紹介、演習林に関する解説もいたします。

公開日 4月21日(土)

22日(日)

時間 午前9時から午後4時まで

(柚ノ木～地蔵峠間は、入林を午後2時30分まで)

公開区域 君津市折木沢地先、演習林ゲートから黒滝方面、猪ノ川林道に沿って約2km、および柚ノ木歩道約1km地蔵峠まで

車でお越しの際は、千葉県立君津亀山少年自然の家の駐車場をご利用下さい。君津亀山少年自然の家から送迎バスが運行されます。運行時間等について、詳しくは君津亀山少年自然の家(電話0439 39 2628 FAX0439 39 2609)にお問い合わせ下さい。上記以外の最寄りに駐車場はありませんので、JR久留里線上総亀山駅から徒歩でお越し下さい。駅から演習林ゲートまで約1時間です。公開期間には上総亀山駅に案内板が掲示してあります。昨年に引き続き、黒滝から三石寺までの間の通り抜けを可能としました。一部、健脚向きコースとなりますので、柚ノ木～三石寺間を歩く方は、履き物・服装・装備に十分ご注意ください。上総亀山駅～黒滝～柚ノ木～地蔵峠～三石寺～上総亀山駅の周遊コースは約6時間かかります。

演習林の中では貴重な生物の生態を調べるための試験地がいくつも設けられています。こうした研究の成果は将来私たちの暮らしをよりよくするために役立てられますので、自然環境に影響をあたえないように、公開区域以外には立ち入らないようお願いいたします。演習林内での喫煙・飲酒は禁止です。食事は決められた場所で行います。ゴミは必ずお持ち帰り下さい。

また、上記以外の日時における全敷地内の立入りは許可が必要です。

詳細は、科学の森教育研究センター千葉演習林天津事務所(電話0470 94 0621、FAX0470 94 2321)までお問い合わせ下さい。

(大学院農学生命科学研究科附属演習林)

「教養学部報」第446(4月4日)号の発行

教官による、学生のための学内新聞

佐々木 毅 歴史の「裂け目」との遭遇

古田 元夫 駒場とベトナム
教官 紹介 言語情報科学専攻
超域文化科学専攻
地域文化研究専攻
蜂巣 泉 新星から超新星へ 宇宙膨張は加速して
いる? 後編
大森 拓哉 学生相談所
里見 大作 進学情報センター
宮内由美子 留学生相談室、駒場インターナショナル・
オフィス 留学生との交流
遠藤 泰生 研究会の興奮 アメリカ太平洋地域研究
センター
山口 和紀 情報教育棟
小川 浩 学習図書館と研究図書館 新図書館案内
に代えて
義江 彰夫 美術博物館案内
内野 儀 キャンパスプラザ
定松 美幸 保健センター駒場支所
事 務 部 教養学部の教官組織・事務部

私のいち押し

大築 立志 ソフトジョギングのすすめ

時に沿って

Andor Skotnes Historical Study and Social Movement

昆 隆英 自分自身の価値観
辞典案内(号外)
坪井栄治郎 英語
幸田 薫 ドイツ語
松村 剛 フランス語
安岡 治子 ロシア語
西中 村浩 ポーランド語
越川 倫明 イタリア語
上田 博人 斎藤文子:スペイン語
黒沢 直俊 ポルトガル語
大貫 隆 古典語(ギリシア・ラテン語)
吉川 雅之 現代中国語
野村 剛史 国語辞典
黒住 真 漢和辞典
生越 直樹 朝鮮語
杉田 英明 アラビア語
藤井 毅 ヒンディー語
サイフル バハリ アフマッド マレー語
三沢 伸生 現代トルコ語
中井 和夫 ウクライナ語
柴 宜弘 セルビア・クロアチア語
古田 元夫 ベトナム語
栗谷川福子 ヘブライ語
竹内 信夫 サンスクリット語

近藤 信彰 ペルシア語

「教養学部報」は、教養学部の正門傍、掲示板前、図書館入口、学生課ロビー、生協書籍部、保健センター駒場支所で無料配布しています。バックナンバーもあります。

(大学院総合文化研究科・教養学部)

平成13年度新規放射線取扱者全学一括講習会開催と放射線取扱者再教育用資料の配付

東京大学においてアイソトープや放射線発生装置(X線発生装置等を含む)を使用する人(放射線取扱者)は、全員、所属部局に登録し、放射線安全取扱等の教育・訓練を受講し、特別健康診断を受診することが必要です。とくに、新たに放射線取扱者になろうとする人は、予め所属部局に登録申請し、全学一括で開催される新規放射線取扱者講習会を受講することが義務づけられています。

全学一括の新規放射線取扱者講習会には、研究等に放射線を利用する人を対象とする「RIコース」と「X線コース」、放射線診療従事者を対象とする「診療放射線コース」と「核医学コース」があります。放射線取扱の内容により受講が必要なコースが異なります。

平成13年度の全学一括新規放射線取扱者講習会の開催予定は以下のとおりです。

平成13年度新規放射線取扱者講習会開催日程

| RIコース日程 | (定員) |
|-----------|----------------------|
| 第96回(A) | 5月18日(金)、21日(月) 60名 |
| 第96回(B) | 5月18日(金)、22日(火) 60名 |
| 第97回(A) | 5月28日(月)、29日(火) 60名 |
| 第97回(B) | 5月28日(月)、30日(水) 60名 |
| 第98回(A) | 6月5日(火)、6日(水) 60名 |
| 第98回(B) | 6月5日(火)、7日(木) 60名 |
| 第99回(A) | 7月10日(火)、11日(水) 60名 |
| 第99回(B) | 7月10日(火)、12日(木) 60名 |
| 第100回 | 10月4日(木)、5日(金) 60名 |
| 第101回 | 12月12日(水)、14日(金) 60名 |
| 英語RIコース日程 | |
| 第11回 | 12月13日(木)、14日(金) 30名 |
| X線コース日程 | |
| 第72回 | 5月17日(木) 120名 |
| 第73回 | 6月4日(月) 120名 |
| 第74回 | 7月2日(月) 120名 |
| 第75回 | 12月6日(木) 120名 |
| 英語X線コース日程 | |
| 第8回 | 12月6日(木) 30名 |

(以上の各コースはアイソトープ総合センターの教育訓練棟で実施します。)

各回の定員を上回る申込みのある場合には、受講する

回を変更して頂く場合もあります。

また、日本語が理解できない留学生や外国人研究者のために、英語によるRIコースとX線コースを12月に開催します。新たに外国人受入れ予定のある関連研究室では、ご承知おき下さい。

5月と6月開催のRIコースおよびX線コースの受講希望者は、所属部局の事務局または放射線管理室へ4月17日(火)までにお申込み下さい。

なお、第100回、第101回RIコース、第11回英語RIコース、第75回X線コース、第8回英語X線コースについては、9月1日頃、受講対象者に改めて案内をお送りします。その際にお申込み下さい。

このほかに、全学一括新規放射線取扱者講習会の診療放射線コースと核医学コースも開催する予定です。詳細が決まり次第、病院部局の担当掛に連絡いたします。

平成13年度新規放射線取扱者講習会の開催日程と募集については、アイソトープ総合センターのホームページ(http://www.ric.u-tokyo.ac.jp/edu/training_j.html)でも案内しています。

一方、以前より放射線取扱者である人は、毎年、それぞれの部局で再教育を受けることが法令により定められています。実施内容や方法については、それぞれ所属の研究室や部局の担当者に確認して下さい。

アイソトープ総合センターでは、東京大学における放射線取扱者(約5,800名)の再教育における参考資料として、毎年、年度始めに8~12ページの小冊子「放射線取扱者再教育用資料」に登録されている取扱者全員に配付しております。平成13年度に配付する「再教育用資料の19(2001)」の内容は、「フィルムバッジに変わる新しい個人被ばく線量測定バッジ」、「液シン試料の測定後の処理について」、「核燃料物質と核原料物質について」です。資料が配付されましたら目を通して頂き、今後の研究および放射線管理の参考にして下さい。

(東京大学アイソトープ総合センター)

データベース出張講習会のご案内

情報基盤センター図書館電子化部門では、データベースを利用した文献検索や文献入手に関する出張講習会をご要望に応じた内容・時間で実施しています。こちらから研究室や教室までお伺いしますので、ゼミや授業などで是非ご活用下さい。

日時・会場・定員・内容:

ご相談に応じます。

例えば...

- ・Web of Scienceを中心に海外文献の検索方法と文献入手について
- ・新大学院生向けの基本的な文献調査方法についてなど。

申し込み方法:

希望日時、講習場所、希望講習内容、参加予定人数、

連絡先を明記し、情報基盤センター学術情報リテラシー掛（内線：22649）までメールで（literacy@lib.u.tokyo.ac.jp）ご連絡下さい。平成12年度の出張講習会
<http://www.lib.u.tokyo.ac.jp/dl/koshukai/h12index.html>をご参照下さい。
 計565名の方が受講されました。



講習会風景
 （情報基盤センター）

コンピューター・ネットワーク利用セミナーのお知らせ

情報基盤センターでは、コンピューター・ネットワーク利用セミナー（第15回～第17回）を以下のとおり開催します。本セミナーは、本学の教職員、学生等を対象としたコンピュータとネットワークを適切に利用するために必要な技術等に関する講習会です。また、ATM遠隔講義・会議システムを利用して双方向に中継することで、本郷キャンパスと駒場キャンパスの2個所で受講できるようにしています。

参加ご希望の方は、受講するセミナーのタイトル、受講会場（本郷、駒場）、氏名、所属、電子メールアドレス（または内線電話番号）を明記し、seminar@itc.u.tokyo.ac.jp宛に電子メールでお申し込み下さい。参加費用

は無料です。
 問い合わせ等

seminar@itc.u.tokyo.ac.jp
<http://www.itc.u.tokyo.ac.jp>

（第15回）

タイトル 学内向けサービス概要紹介

日時 4月18日（水）15時00分 17時00分

場所 （本郷）情報基盤センター4F 遠隔講義室
 （駒場）教養学部1号館2F 163番教室

概要 このセミナーは、情報基盤センターが展開している学内向けサービス（コンテンツ、メディア、ネットワーク）の全てを分かりやすく紹介し、利用できるサービスを見つけて頂くためのものです。特に、新しい本学の教職員になった方は、是非ご参加ください。

講師 情報基盤センター 山口、玉造、茂出木 他
 備考 講師の説明は本郷側の会場で行います。

（第16回）

タイトル ATM遠隔講義・会議システム利用講習会

日時 4月27日（金）15時30分 17時00分

場所 （本郷）農学部7号館B棟231+232教室
 （駒場）教養学部1号館2F163番教室

概要 UTnetのATMネットワークを利用した「ATM遠隔講義・会議システム」について、その概要と操作法について説明を行います。遠隔会議にも利用できますので、遠隔講義を計画している先生方だけでなく、事務職員の方も是非ご参加ください。

講師 情報基盤センター電子教材掛
 備考 講師の説明は本郷、駒場の両会場で行います。

（第17回）

タイトル ホームページの作り方

日時 5月7日（月）16時00分 18時00分

場所 （本郷）情報基盤センター4F遠隔講義室
 （駒場）教養学部1号館2F163番教室

概要 ホームページを作るために必要となる、WWWの基本的な仕組み、HTMLや画像フォーマットに関する基礎知識、オーサリングツールの使い方などについて解説します。またページを公開する上で、技術的・内容的に注意しなければならない事について話します。ホームページを作りたい・作らなければならない方、またページの内容をチェックしなければならないような方を対象とします。

講師 浅田 卓哉 助手（情報基盤センター）
 備考 講師の説明は本郷側の会場で行います。
 （情報基盤センター）

総合研究博物館常設展示

「骨 生き物を支えるもの」

総合研究博物館企画展示

「神岡展」

総合研究博物館新規整理標本コーナー

「石と金属の飾り物 前方後円墳時代の装飾品」

継続中の「骨」展に加え、次の展示を開催します。「神岡展」では、神岡鉱山を図資料とモノの両面からの検証を試みます。特に、神岡鉱山に産出する鉱物・鉱石・岩石、東京大学の研究者が残した研究素材、また探鉱に使われた道具、作成された坑内スケッチ、坑内ボーリング資料、さらには資源探査のための600mボーリングコアなどを展示して、神岡鉱山を多角的に解剖してみます。

「石と金属の飾り物」では、明治・大正期に収集された古墳時代の遺物のうち、新規にデータベース化を進めている身体装飾品類の収蔵品の一部を公開します。

神岡鉱山は、日本を代表する鉛・亜鉛などの非鉄金属鉱山であり、明治以降の日本における産業の近代化を支えてきた鉱山でした。

神岡鉱山のルーツは8世紀初めの養老年間に遡ることができるといわれていますが、本格的な採掘は16世紀末から行われたようです。当初は銀山として採掘されましたが17世紀末には飛驒の鉱山は衰退し、鉱石も銀から銅・鉛となりました。明治になると、三井家は金属資源に注目し神岡に進出し、明治9年に入手した蛇腹平1番坑から三井組の神岡鉱山稼行が始まりました。その後、生野・別子・足尾などの日本を代表する鉱山が次々と閉山に追い込まれていった中で、神岡鉱山は近代的採掘法を導入し世界でもトップレベルの高効率鉱山として現在に至っています。

神岡鉱山は飛驒産地の北端に位置し、飛驒変成帯に含まれ、分布する岩石は、いわゆる飛驒片麻岩です。鉱床は、栃洞、円山、茂住の3鉱床に分けられますが、いずれも複雑に褶曲した片麻岩中の晶質石灰岩を交代して生じたスカルン鉱床である。鉱石鉱物としては閃亜鉛鉱（ZnS）方鉛鉱（PbS）で、その他、黄銅鉱、磁硫鉄鉱、磁鉄鉱、黄鉄鉱、硫砒鉄鉱などが少量含まれます。また、神岡鉱山からは神岡鉱と名付けられた新鉱物が発見されています。

また、近年はニュートリノ観測のためのカミオカンデ・スーパーカミオカンデが設置されていることで知られています。

常設展示

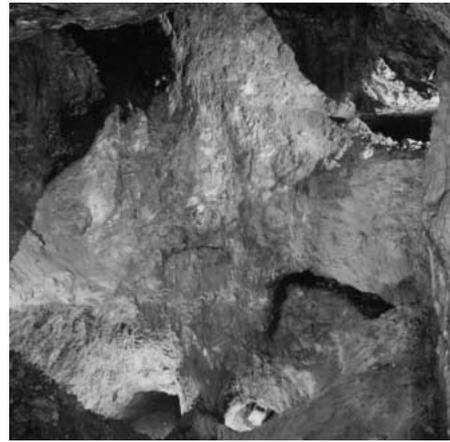
展 示 名 「骨 生き物を支えるもの」

会 期 2001年1月15日（月）～6月29日（金）
土日祝日休館

新規整理標本コーナー

展 示 名 「石と金属の飾り物 前方後円墳時代の装飾品」

会 期 2001年4月9日（月）～6月29日（金）



ニュートリノ観測のために宇宙線研究所が神岡鉱山に建設したスーパーカミオカンデ（建設中の写真）

土日祝日休館

企画展示

展 示 名 「神岡展」

会 期 2001年4月16日（月）～6月29日（金）
土日祝日休館

主 催 東京大学総合研究博物館

協 力 神岡鉱業株式会社

開 館 時 間 午前10時～午後5時（入館は4時30分まで）

会 場 東京大学総合研究博物館

入 場 料 無料

お問い合わせ 東京大学総合研究博物館 ハローダイヤル
03 3272 8600

U R L <http://www.um.u-tokyo.ac.jp>

そ の 他 ポスターは学内各所に掲示してあるほか、
キャンパス内の総合研究博物館の看板に掲示してあります。

情報公開室の開設

本学の保有する行政文書の情報公開に関する相談・受付窓口として情報公開室が開設されました。開設場所、開設時間、開設日は以下のとおりです。

場 所 東京都文京区本郷7丁目3番1号

東京大学山上海館龍岡門別館内（1階）

電 話 03 5841 2047

開設時間 9時30分から16時30分まで

開 設 日 次の日を除く毎日です。

土曜日、日曜日、休日

12月29日から1月3日まで

2月25日から27日（本学第2次学力試験前期日程試験日）

3月13日、14日（本学第2次学力試験後期日程試験日）

4月12日（本学創立記念日）

なお、地図等、詳細についてはhttp://www.adm.u-tokyo.ac.jp/koukai/index_j.htmlをご覧ください。

広報委員会委員長就任の挨拶

広報委員長 石川正俊

4月から広報委員長を拝命致しました。情報化社会の進展に伴い、広報活動がますます重要性を増す時代にあつて、このような役を仰せつかったことに身が引き締まる思いですが、大塚前委員長を初めとする前任の先生方のご努力によって築き上げられた情報発信の形態を引き継ぎながら、ますます多様化する情報化の波や社会構造の変化に対応すべく、微力ながら新しい広報の姿を求めていきたいと考えております。

佐々木総長の施策の一つとして、東京大学の知的リソースの有効活用と効果的発信に対してエネルギーに取り組み、東京大学の存在感を求心的・効果的にアピールするという方針が示されており、広報担当の総長特別補佐の廣渡先生並びに広報委員会等を中心として、広報関連の強化が企図されております。この方針を具体的に実現すべく、(1)以前にもまして積極的な情報の発信、(2)多様なメディアの活用、特に情報技術の積極的利用、(3)学内に埋もれている発信すべき多様な情報の発掘、(4)情報公開、独法化、産学連携等への広報面での対応、(5)広報活動の自己・外部評価等を活動目標として、学内外の状況の変化にも迅速に適應しながら、様々な展開を図っていく所存でございます。

具体的に学内外の方々には、学内広報、淡青及びUT Forum21、ホームページ等を通して情報が提供されているわけですが、各紙面の充実はもちろんのこと、例えば、各広報誌の電子化を推進し、検索機能などを活用して整理された情報を提供したり、各部局との連携を強化して学内情報の一本化を目指したりして、氾濫する情報を少しでも整理された形で提供できるよう様々な方策の導入を検討したいと思っております。

また、4月より実施されている情報公開関連では、既に龍岡門のところに情報公開室が設置されており、情報の請求に対する受け入れ態勢を整えております。さらに、産学連携に対しても広報面からのサポートを計画致しております。

まだ、就任早々でどれだけのことが実現できるか未知の部分も多々ございますが、広報委員会の先生方、広報室並びに情報基盤センターのホームページ担当の職員皆様方と相談しながら、新しい時代の広報を作っていくと考えております。

広報委員長退任の挨拶

医学系研究科教授 大塚柳太郎

この3月末日をもちまして、広報委員長を退任させていただきますことになりました。私は思いがけず、この大役を2年間にわたり仰せつかりましたが、多くの皆様のご援助を賜り、忙しいなかにも充実感のある日々を過ごさせていただきました。この間、蓮實重彦総長、青山善充・小林正彦両副学長、部局長、総長補佐の皆様はもとより、多くの教職員・学生の皆様からいただきました叱咤激励とともに、暖かいご助言・ご協力に心より感謝申し上げます。この2年間に広報委員をお努めになった教官の皆様、広報活動を支える事務局の皆様には、予想をはるかに超える作業を担っていただきありがとうございました。

広報活動あるいは情報発信を質的にも量的にも向上させることは、本学の緊急の課題のひとつであり、蓮實総長をはじめ本学の構成員が強く期待を表明されてこられました。多くの企画が私の前任者のときから準備されており、私が着任してから実現ができたものだけでも、平成11年度における『淡青』の刊行、平成12年度における『UT Forum 21』の刊行、そして平成12年度に高校生などを対象としたオープンキャンパスの開催などがあげられます。ホームページの充実も重要な課題で、広報委員会ホームページ小委員会のメンバーを中心に、その改善を進めていただきました。

広報委員長を務めさせていただき、社会に向けたさまざまな活動が全学的に、あるいは各部局で行われていることを深く認識いたしました。また、ご承知のように、1昨年11月に発足いたしました情報委員会の活動も活発化しております。今後、全学の協力で広報活動・情報発信がますます充実し、卒業生や高校生を含む学外の方々、さらには国外の組織や個人との双方向的な意思疎通が進められることを期待し、退任の挨拶とさせていただきます。

井上 孝 名誉教授

本学名誉教授井上 孝先生が、2月21日（水）に急逝されました。享年83歳でした。

先生は、東京帝国大学工学部土木工学科を昭和17年9月に卒業された後、海軍技術士官として、北方地域の海軍基地防備計画に参画されました。戦後、東京都、総理府、建設省に勤務され、都市計画、区画整理、首都高速道路等の全国各地の都市計画分野の第一線で計画実務を数多く担当されました。昭和39年9月には建設省都市局区画整理課長より、新設中の本学工学部都市工学科に移り、昭和40年4月に設置された都市計画第五講座の初代教授に就任されました。先生は都市工学科の発足時から激動の東大紛争期を経て停年退官までの14年間にわたり、都市交通計画講座の確立、都市工学科の発展と都市計画プランナーの育成に尽力されました。

本学退官後は、横浜国立大学工学部に移られ、同大学土木工学科の設立に携わった後、昭和58年3月に退官さ



れました。その後、長らく（財）計量計画研究所理事長を勤められました。この間、学術面では日本都市計画学会会長、実務面では都市計画中央審議会会長等を歴任され、学会と実務との橋渡しに努められました。また、マニラをはじめ多くの途上国の都市交通計画に積極的に関与され、わが国の国際技術協力に貢献されました。さらに、国際住宅都市計画連合の初のアジア出身会長に選任される等、わが国の都市計画の国際化に主導的役割を果たされました。

これらの多方面にわたる先生の御活躍は、日頃私共に語っていた都市計画における理論と実務とのつながりの重要性、practical idealistをひとつのプランナーの理想像としていた先生の姿勢を示すものでした。矢内原忠雄先生門下の無教会派のキリスト者として、また世界の古典文芸に精通した教養人として、広い歴史的視野からプランナーの役割、都市計画の方向を示唆していただいたように思います。

ここに、これまで私共を御薫育いただきましたことに感謝しつつ、心より先生の御冥福をお祈り致します。

（大学院工学系研究科・工学部）

レポート雑感

期末試験実施法に関する掲示をみると、専門科目では試験よりもレポートを課す教官が多いことがわかる。もちろんそれは、学部によるだろう。ではそのレポート執筆について学生たちはどのような指導を受けてきているのだろうか。「レポートや研究論文の書き方を大学で教えてもらったことがあるか」と、学部学生に尋ねたことがある。大半の学生からは、指導を体系的に受けたことはなく、見様見真似、自分なりの工夫でともかく作成しているという答えが返ってきた。この頃では論文・レポートの書き方に関するノウハウ本も出版されてきているが、その類の本に目を通したことがある学生も多くはない。専攻内容によるが、中には卒業論文になってようやく執筆のし方の指導を受ける学生もいる。つまり、多くのレポートを提出しているが、同じ課題で他の友人は何を論じているのか、質が高いと評価されるレポートがどのようなものを学生自身は学



ぶことなく、レポート執筆のために学んだ内容を忘れた頃に、評価としての単位認定の可否と成績のみが、返される経験を積み重ねて卒業していくことが多いのではないだろうか。

筆者は、前任大学や非常勤先も含め、学期中に数回小レポートを課し、3人以上の友人のレポートを互いに読み内容と書き方を批判的にコメントしあうことを何度か試みたことがある。最初は学生のブーイングにあうが、相互に刺激されるのか、学期中に数回実施すると提出されるレポートの質は高まってくる。学生相互のコメントはかなりの確度であり、その場で自分へのコメントを読むことによって、他者に宛てて論理的に書くことに自覚的になってくるようだ。これは筆者の学部教育への拙い試みの一つにすぎないが、大学生の学ぶ力を育てる教育法の工夫をされている方も多いに違いない。高等教育法に関わる情報交換が、教員免許をもたずに教壇にたつ教師である大学教員にも必要な時期にきているのではないだろうか。

(大学院教育学研究科 秋田喜代美)

(淡青評論は、学内の職員の方々にお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。)

広報委員会からのお知らせ

広報委員会では、積極的な情報発信の取り組みのひとつとして、平成13年4月から発行される「学内広報」を本学のホームページより学外者にも公開することとなりました。

よろしくご理解、ご協力ください。

発行日 各月(8月を除く)の第2・4週の水曜日
原稿締切日 発行日の全週の水曜日 午後5時
配布日 発行日の週の金曜日

〔次号の原稿締切〕

4月18日(水)午後5時

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、総務課広報室を通じて行ってください。

1212 2001年4月11日
東京大学広報委員会
〒113 8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号
東京大学総務課広報室 ☎(3811)3393
e-mail kouhou@adm.u.tokyo.ac.jp
ホームページ http://www.u.tokyo.ac.jp/index_j.html